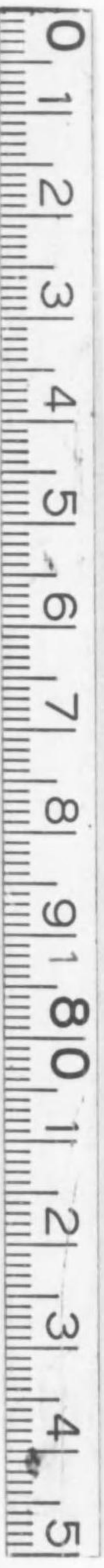
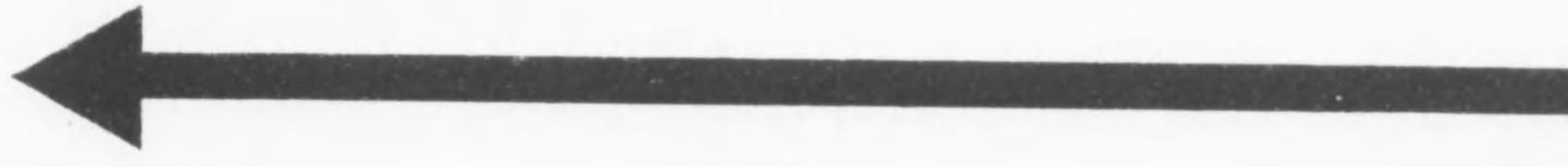


348  
488

道華集



始



特234  
786

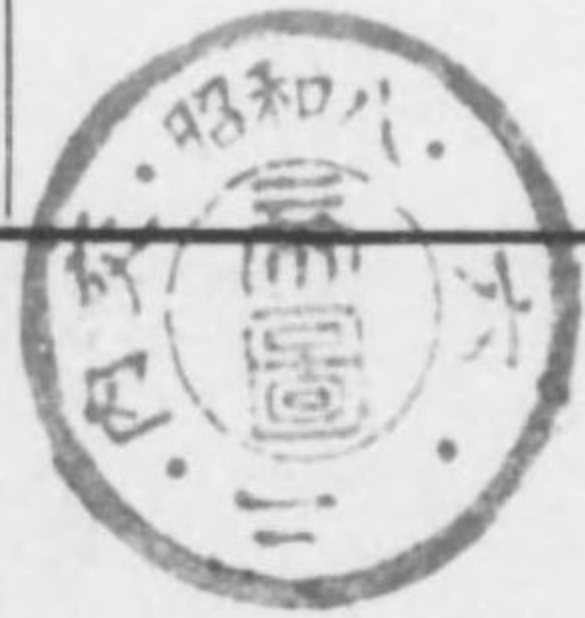


原田祖岳編

道  
華  
集

東京

信正  
同愛會發行



道華集總目次

道華集序	一	謙虛利中	四
第一 略看經法		積善	三
懺悔文	三	改過	二四
南無歸依三寶	三	決科要語	二九
四句誓願文	五	功過格款	二九
興正護國回向	五	功過格款計量紙	二六
正念標語	六	第三 善惡因果種壽和讚	
第二 拔萃		はしがき	一九
冠註 譯陰陽錄	七	種壽和讚本文	二五
拔萃 譯陰陽錄序	七	正宗國師坐禪讚	
冠註 譯陰陽錄自序	九	坐禪讚本文	二七
譯陰陽錄凡例	一	永平高祖發願文	
譯陰陽錄本文	三	發願文本文	二八
立命之學	三		

道華集序

みな人の望むところは人天の福報を失なはずして、最上乘果に至るにある。のみならず、神明、羅漢、支佛菩薩、佛陀もみな望ませ給ふところである。たゞ初心の人は自己安穩のためなれど、神明佛陀は教化のため望ませ給ふの相違あるのみであります。

この集 初めに略看經法、次に譯陰隱錄、次に善惡因果種蒔和讚、次に正宗國師坐禪和讚、次に永平高祖發願文の五集である。その略看經法は信心自照の精要であつて、佛子始終の直指針であり、その陰隱錄は人天の福報を得るの要訣であり、その種蒔和讚は人天の福報を得るの要訣であるとともに、最上乘の菩提果にも至るの精要であり、その坐禪和讚は最上乘果

道華集序

を得るの唯一無二の無上道であり、その發願文は生々世々三寶に値遇して  
 永く無上道を離れず、竟に無上佛果に直入せしめんとする大紅絲線である。  
 だがこの五書即ち一書一書に全五書の妙諦玄旨がある。この五書は一切佛  
 子の信、解、行、證、入の榜様でありますから、是れを活字に附して、佛  
 子止住の處を明かにして、有縁の道俗に頌ち、人天の行路を照し、世道人  
 心の小補と爲さんとするに於てあります。

靈松山頭先師の無縫塔下に於て

昭和八年四月三日

小師 大雲祖岳血淚百拜

第一 略 看 經 法

道華集序

を得るの唯一無二の無上道であり、その發願文は生々世々三寶に値遇して  
永く無上道を離れず、竟に無上佛果に直入せしめんとする大紅絲線である。  
だがこの五書即ち一書一書に全五書の妙諦玄旨がある。この五書は一切佛  
子の信、解、行、證、入の榜様でありますから、是れを活字に附して、佛  
子止住の處を明かにして、有縁の道俗に頒ち、人天の行路を照し、世道人  
心の小補と爲さんとするにありますが。

靈松山頭先師の無縫塔下に於て

昭和八年四月三日

小師 大雲祖岳血淚百拜

第一  
略看經法

懺悔文

(三返且ツ音讀)

我昔所造諸惡業 皆由無始貪瞋癡  
從身口意之所生 一切我今皆懺悔

南無歸依三寶

佛祖正傳の教授戒文に曰く、三寶に三種の功德あり、所謂る一體三寶、現前三寶、住持三寶是なり、一度び歸依する時三種の功德悉く皆圓成す、南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧、歸依佛無上尊、歸依法離塵尊、歸依僧和合尊、歸依佛竟、歸依法竟、歸依僧竟と、我今發心す、自身の爲に、人天の福報と、聲聞緣覺と、乃至權乘諸位の菩薩道を求めず、唯最上乘の爲に菩提心を發す、願くは法界の衆生と與に、一時に同く阿耨多羅三藐三

菩提を得んことを、十方盡虛空界一切の諸佛に歸依し奉り、十方盡虛空界一切の尊法に歸依し奉り、十方盡虛空界一切の賢聖僧に歸依し奉る、如來、應供、正徧智、明行足、善逝、世間解、無上師、調御丈夫、天人師、佛世尊に歸命し奉る、是れ歸依三寶の榜樣なり、次に三聚淨戒あり、第一攝律儀戒、第二攝善法戒、第三攝衆生戒なり、是れ即ち歸依三寶の實相なり、次に十重禁戒あり、第一不殺生戒、第二不偷盜戒、第三不邪淫戒、第四不妄語戒、第五不酤酒戒、第六不說過戒、第七不自讚毀他戒、第八不慳法財戒、第九不瞋恚戒、第十不謗三寶戒なり、是は之れ歸依三寶の妙用なり、上來三歸、三聚淨戒、十重禁戒等の十六條の佛戒は、先佛の護持し玉ふ所曩祖の傳來し玉ふ所なり、宿值般若の善根力に依つて、我れ今、見聞信解し、歎喜頂受することを得たり、願くは一切の衆生と俱に、今身より佛身

に至るまで、能く之を護持奉行せん、學に於ても、無學に於ても分別の相を生ぜざる、是を無上菩提と名け、摩訶衍の禪定と名け、又第一清淨者と名く、

四句誓願文 (三返)

衆生無邊誓願度 煩惱無盡誓願斷  
 法門無量誓願學 佛道無上誓願成

興正護國回向 (一返)

願此功德普及一切 寶祚無疆國運隆盛  
 家門繁榮如意吉祥 我等衆生皆成二佛道



道華集第一 楞嚴經法

十方三世一切佛 諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若婆羅密

六

正念標語

正信體現剛健同愛

第二

拔萃 冠註 譯 陰 虜 錄

(福祿壽名の秘訣)

道華集第一 楞嚴經法

十方三世一切佛 諸尊菩薩摩訶薩 摩訶般若婆羅密

六

正念標語

正信體現剛健同愛

第二

拔萃  
冠註

譯

陰

鷲

錄

(福祿壽名の秘訣)

冠註 譯陰隱錄序

小衲三十年前この書を始めて讀んで深く感ずる所あり、且つ世道人心の日に荒み行くを歎き、この書を普及するを以て最も効果あるものと信じ、或は二十冊、或は三十冊と時々購ふて心あるものに頒ち居りしも、其の後大道社に再三請求するも重版せず、遺憾に堪へずして今日に至つた。然るに世道倍々荒蕩して其の極るところを知らざる有様であるから、斷然今回いさゝか拔萃して冠註を施し、以て陰隱錄の言はんと欲して未だ言はざる所を補ふて同好の君子に頒つ事にした。

この書は大自然の因果律と、神明佛陀の照覽擁護ある事を知らしめるに議論を以てせず、袁氏自らの體驗と幾多の歴史上の確證とを以てし、富貴

功名を得んとする者の心得を明かされたものであるから、何人も一本を座右に安じて時々反省照顧して人生行路の指針と致さしめたき微衷に外ならないのである。

即ち是は人生行路の一大指針であつて、未だ大解脱道の要門ではない。けれども人生の福祿壽を得て、大解脱道に至らしめんとする人天教化の佛法である事を信じて、何人も信受奉行すべき一大事なりと信ずるのである。

若狭靈松下に於て

大雲祖岳誌

袁氏家訓譯陰騭錄自序

余幼年の時、好みて讃岐の無名老人が口授せし和語陰騭錄を讀む。老人みづを著さず。唯無名と號す。安永年間の人。毎夜寢に就くの前、必ず几を拂ひて卷を開き、虚心にして其の中の一編を朗讀し、畢りて枕に著くを樂みたりき。既に長じては、袁了凡の原書を見むを欲し、友に謀りて、心に掛けしが、數年の後、始めて一本を手に入れぬ。開いて之を讀むに、和語の本とは互に詳略あるを見る。されば一に原書の精神を譯出し、其れに和語の深切をも補ひ加へて、一本を完了せばやと思ひ立ち、暇を偷みて一篇づゝを物したれども、中々卒業の期は見えざりけり。今年の夏、宿痾を京都の一得庵に養ひたりしにゆくりなく兒が大患に遭ひて、看病する百五十日、初めは晝夜箸を把る間

も無かりしが、後にはや、書を繕き、筆を拈るの暇を得たり。即ち此の譯を卒業して、生き返りし兒を始め、二人の娘にも、一本づゝを寫し與へて、父が幼時の如くに、讀み樂ましめなば、縦ひ俊秀とはならずとも、必ず君に忠に、親に孝に、婦に良に、夫に貞なる良民となりて、人と生れし幸福を、失はざるに庶幾からむかとて、己が宿痾をも打忘れて勉めぬ。是れなむ親の慈悲にて、昔袁了凡が此の書を著して、其の子天啓に與へられし心も、斯くならむと思ふ。

時は明治廿七年の秋、高臺寺の菽散り過ぎて、一得庵の蛩、苔の間に咽びあふ頃  
山陰道士 川合清丸 誌

譯陰隱錄凡例

此の書、原本には、題して明賜進士袁了凡先生陰隱錄と云ふ。即ち支那明朝の賜進士袁黃字は了凡と云ふ先生が、其の兒天啓に書き與へられし教訓書なり。されば全篇其の心得を以て讀むべし。余今其れを通譯せるが故に即ち題して袁氏家訓譯陰隱錄と云ふなり。

因に云ふ。袁了凡は明代の大儒にて、歴史綱鑑に評を加へし人なり。且軍事にも通曉せしと見えて、吾が文祿年中、豊太閤の征韓の役には、賛書軍務と云ふ官を帯びて、明の大將李如松と共に朝鮮へ來りし人なり。

支那には及第の業と云ふ事あり。其は彼の國の制度にては、士農工商の別ちなく學才の優るゝ者は、縣の學校より、府の學校へ選舉し、府の學校

より、道の學校へ撰出して、其の人物才能のまに／＼、官員吏員に採用せらるゝが故に、苟も立身出世の志ある者は、天下一般勉め勵みて、學問修行せざるは無し。之を及第の業と云ふ。されば此の書、始終此の及第の事を引て教訓せり。此の書を読む者、先此の事を心得置かざるべからず。此の書主に原書に就て譯出せりと雖も、傍無名老人が講述したる和語陰騭錄に助けらるゝ者多し。殊に余が幼時に愛讀せしは、即ち和語の分なりければ、余は無名老人の賜物を拜受すると夥し。今譯成るに及びて、茲に謹て其の恩を謝す。

甲午の年の秋の暮つかた

譯者 川合清丸 誌

拔萃冠註  
袁氏家訓 譯陰騭錄

— 富貴功名の原理 —

譯者曰く。陰騭は、ひそかにさだむると訓む。其は人の身の上の、吉凶禍福は、其の行ひの、善惡邪正に因りて、自然に人知らぬ中に隔まるこ云ふ義なり。而して此の二字は、書經に出でたり。

立命之學

譯者曰く。立命の二字は、孟子に出づ。命は、天命の事。立とは、建立の義にて、吉凶、禍福、貧富、壽夭等の天命を、己れより造り出だして自分が建立する意なり。さて此の一篇は、聖人も死生命あり、富貴天に在りて申されて、人間一生の福分は、生れ出でし時、既に一定したるものなれど、更に

天とは因果必然の  
理その道に則し  
つて其を三寶し  
擁護するに實し  
及諸天の在りて  
事天の是れ命子  
の志の程度と實力

の程度を見計ふて  
親が教養助力下さ  
るが如し

其の後の行ひの善惡邪正に因りて、短命に定まりし者も、長命となし、貧賤に定まりし者も、富貴となし、子なきに定まりし者も、子あらしめて、生前の天命を、勝手次第に建て直す爲方を著はすが故に、題して立命之學と云ふ。是れ此の書一部の主眼なり。

予幼年にして父に離る。後成長しては及第の業を學びぬ。或時母の仰せらるるやう、及第の業は、前途甚だ覺束なき業なれば、我等が差當りの生計には頼みがたし。幸ひ醫業は、人をも濟ひ身をも救はるゝものなれば、業を棄てて、醫を學ばむこそ善けれ。是れ汝が父の思召なりしとぞ宣ひける。母の命否むべきに非ざれば、其れより學業を廢して、更に醫術を學びぬ。

其の後慈雲寺に遊びて一人の老翁に遇ふ。髯の長き風采、丈の高き容貌、何さま高德の人と見受けられければ、予は慇懃に敬禮したり。其の時老翁予に告げて曰く。足下は及第仕官の人なり。明年は、必ず學校より選舉せらるべし。何が故に學を廢せる乎と。予實を以て之に答へたり。其の時老翁告げて曰く。吾れは雲南にて、孔先生と稱せられて、邵康節が易道の秘極を得たる者なり。此の道、足下より外に授くべき者なし。故に遙々と尋ね來ぬ。足下何方かに、吾が居るべき處を周旋せよと。予は餘りの尊さに、案内して家に歸り、此の由を母に告げければ、母も其は凡人には非ざるべし。大切に接待して、其の教を受けよと申されし故、一室をしつらひて、遂に之に留めぬ。

其れより種々の事を占はせ試るに百占百中ならざるは無し。是

に於て予其の教に隨ひて。又及第の業を學べり。時に老翁予が爲に、及第の景況を占ひ示して曰く。足下某の年の縣の試験には、第十四番目に及第し、府の試験には、第七十二番目。道の試験には、第九番目に及第すべし。而して其の試験に赴くは、必ず明年ならむと。又更に一生の吉凶を占ひ示して曰く。足下某の年に、第幾番目の試験に及第してより、官の祿米を戴くこと、都合九十石五斗なるべし。其れより某の年に貢士とならむ。貢士となりて後某の年に、四川名地の大尹名官に任ぜられむ。任に在ること二年半にして京に歸らむ。壽命は五十三歳の八月十四日、丑の刻、家にて病死せむ。只惜むらくは、一生子なしと。予大切に之を記録し置きて、以て一生の覺悟を定めたり。

其の後、縣府道等の學校にて、試験せらるゝ年月は固より、及第の番數まで、一つとして老翁の占ひ定めたる所に外るること無し。其の中一つ二つの心得がたき事ありき。其は老翁は、予が祿米を戴くこと、都合九十一石五斗と占ひたり。然るに七十餘石に及びける時、屠公と云ふ人、予を最負にや思はれけむ、定めの時節より前に、餘の人々に押し雜せて、貢士に出ださむとせられたり。是の時升數の相違に付て、心竊に老翁を疑ひぬ。然る處に、楊公と云ふ人あり。屠公の不吟味なるを見出して、之を批難せられければ、其の事止みて、つらく年月を経たり。是の時又、年月の相違に付て、心竊に老翁を疑ひぬ。其れより程經て後、溟公と云ふ人あり。予が試験場にて作りたる文章を見出だして、歎美して



曰く、此れは是れ堂々たる大文章なり、斯かる博識の儒家を御用に立てぬは不忠なりとて、遂に縣應に申し立てて、法の如く貢士とせられたり。是の時、予が前より戴きし祿米を計算するに、恰も九十一石五斗となれり。予此れに囚りて、進むも退くも、皆定まれる命數あり、遅きも速きも、悉く然らしむる時節あり、老翁が占ひこそ、實に予が一生の命數なれと、固く信じて、少しも他の望みなく、心中無欲になりて、胸裏甚だ安閑たり。

其れより貢せられて燕都に入り、留まること一年許りにして出でて南雍名地に遊び、未だ役所に入らずして直に棲霞寺に詣り、予が舊友雲谷禪師と一室の中に對話すること三日三夜、殆ど眠食を忘れたり。

其の時雲谷予に問て曰く。凡そ凡夫が、聖者と作ること能はざる所以は、唯妄念に纏はるゝが故なり。足下我れと對すること三晝夜、其の間竟に妄念の動きしを見ず、抑も是はいかなる見解ありて然る乎と云へり。予が曰く、吾れ曾て孔先生に、一生の事を占ひ定められて、人の吉凶、禍福、死生、存亡は、皆定まれる命數あることを確知したり。然らば何の求る所ありてか、妄念妄想を起すべきと答へぬ。

雲谷之を聞て、我れ今までは足下を高く買ひて豪傑の士と思ひたりしに、矢張平々の凡夫なりけりとて、聲を揚げて笑ひたり。予其の仔細はいかに、承りたしと問ひければ、雲谷の曰く。凡そ人の命數は生の朝より、死の夕まで、一定して生れ出づるもの

なりと雖も、極善の人と極悪の人とは、生來作す所の善惡の業に引かれて、稟けて生れし命數を破算し終るものなり。唯平々の凡夫のみ、定まれる命數に縛せられて一生を過ぐるものぞ。足下二十年來彼の老人に算用しつめられて、其れを一毫も轉ずること能はざるは、豈平々たる凡夫に非ずやと云へり。

予が曰く。是は奇らしき論を承はること哉。然らば人間の稟け得て定まりたる命數も逃るれば逃るる道のあるもの乎と。

雲谷の曰く。元來天命は、我れより之を作し、禍福は己れより之を求むるものぞ。聖人の作り給へる書經に曰く。「作善天降之百祥。作不善天降之百殃」と。若し初生の時に一定したる天命が一生動かすべからずば、善を作し、とて、争てか之に百の祥を降

すべき。不善を作し、とて、争てか之に百の殃を降すべき。又同書に「天命靡常」と云へり。常なしとは禍福とも、人の善惡次第に動くものにて、天の方には膠付けの命數なしと云ふことなり。是れ皆足下の知る所に非ずや。又我が佛經の中には、「求功名得功名。求富貴得富貴。求男女得男女。求長壽得長壽」と云へり。夫れ妄語は如來の大戒なれば、諸佛菩薩の何とて人を欺き給ふべき。足下之を何とか思へると云へり。

予膝を進めて曰く。猶疑ひあり、孟子の曰く、「求則得之。求在己者也云々。是求無益於得也。求在外者也」と。是れは仁義道德の如きは、我が心内に備はるものなれば求めさへすれば得らるれども、功名富貴の如きは天に屬して、即ち外に在るものなれば求

めたりとて得らるべからずとなり。此の言錯りなるべき乎と云へり。

雲谷の曰く。孟子の言は錯らざれども足下の解は錯れり。今我れ足下の爲に禍福吉凶皆吾が心より求め得るの例を引て、孟子の語を解かむ。悪人が釘を打ちて人を呪咀するも、一心の業感に依りて、或は人の眼を打ち潰し、或は手足を打ち惱まし、或は命を取り殺すなり。されば眼を打ち潰す鉄釘も、手足を打ち惱ます鉄槌も、命を取り殺す刀も、外より持ち來るには非ず。皆瞋恚の心中より取り出せし物ぞ。又郭巨が釜も、孟宗が筍も、王祥が鯉も他より出て來るに非ず。皆是れ至孝の心中より取り出せし物ぞ。舜禹はもと王の太子に非ず。匹夫の時より仁徳を積みて、四百餘

州の主となり給ふ。是れも四百餘州を一心の誠より取り出し給ひしものぞ。此の例を以て彼の語を解かば、我れに在る者とは、豈仁義道德のみならむや。功名富貴、一切の福分も皆我れに在る者のみ。其の證據は次の文に、「萬物皆備於我」と、明示し給へり。然るを之を我が心内に求めずして、或は他に阿り諂ひ、或は人を偽り欺くなど、種々の謀計を以て求めむとすれば、假令得るとも天命の許さざる所、忽ち之を失ひて後却て害あらむ。故に孟子其の次に又説て曰く、「求之有道。得之有命」と。大祖大師も亦曰く「一切福田不離方寸」と。されば心に就いてだに求めなば、唯仁義道德を得るのみならず、功名富貴も亦得て、内外兩つながら得む。然るをみづから躬に反さうせずして、徒に外に向ひて馳せ求

めなば、仁義道德も、功名富貴も、内外兩つながら失はむ。故に次の文に又曰く。「是求無益於得也。求在外者也」と。さて又易經は天地鬼神を相手に取りて、聖人の作り給へるものなれば、一言一句と雖も、意味深遠なるものなり。其の易經に曰く。「善不積。不足以成名。惡不積。不足以滅身。小人以小善爲無益。而不爲也。以小惡爲無傷。而不去也。故惡積而不可掩。罪大而不可解。」と云へり。此の意は人々少しづつの惡事は、さのみ咎にも成るまじ、神佛も許し給ふらむなどと、軽く思ひて小蟲小魚を無益に殺し、小者召使を無法に使ひ、父兄に逆らひ、朋友に欺き、妻子眷屬の間にも、惡しき事は多くて、善き事は少きが平生の習ひなり。此れ等の小惡、一つも消え失せず、積り／＼て後には、身を滅ぼ

すの大罪となるとなり。又善事に於いても少しづつの善ぐらゐは何の奇特もあるまじと思ひて行はざれども、此れ等の小善も、積り積れば終に大いなる福德となるとなり。されば天命は皆我れより之を作し、餘慶餘殃も皆己れより之を求むるに非ずや。足下之を何とか思へると云ふ。予黙して暫く思案したり。

雲谷又予に問て曰く。孔先生が足下の一生涯を占ひ定めたる状は如何にと。

予答ふるに其の實を以てせり。

雲谷の曰く。然らば則ち足下に問はむ。足下が只今の意は、猶彼の翁の占ひし如く登第も意に満たず、子も無く、壽命も五十三歳にて終る覺悟にて、愚僧が天命を建て直す説は、未だ會得せら

れざるやと云へり。

予良久く思案して答へて曰く。會得せざるなり。如何にとなれば凡そ高官に登る人は、大抵皆福相なり。然るに予が相は薄福なり。さればとて功德を積み、善行を累ねて福分を増長すること能はず。其の上性急にして、世の面倒に堪へ難く、量局くして、人を容るること成り難く、時としては己が才智を以て人を籠絡し、或は會釋なく言ひたき事を言ひ、用捨なく爲たき事を爲るなど、此れ皆薄福の相なり。個様の器にて何とて高官に登らるべき。又子の無かるべきも當然の理なり。凡そ地の穢れたるものは土肥ゆるが故に多く物を生ず。水の清きものは性冽きが故に魚を生ぜず。予は至りて奇麗好きなり。是れ子の無かるべき一なり。又陽春の和氣

が能く萬物を育つる如く、溫和にして汪洋なる人は子も多く持つべき筈なり。予は秋冬の陰氣の萬物を枯らすが如く、怒氣盛むにして和氣に乏し。是れ子の無かるべき二なり。又慈悲は物を生ずるの本にして、無慈悲は物を傷ふの根なり。予は氣位高きが故に己れを引下して人を救ふこと能はず。是れ子の無かるべき三なり。又多言の者は元氣を耗らす故に、攝生の人は多く沈黙す。然るに予は多言にして元氣既に乏し。是れ子の無かるべき四なり。又予は時々大酒して腎精を燦かす。是れ子の無かるべき五なり。又予は往々徹夜して神氣を疲らす。是れ子の無かるべき六なり。其の餘の過惡擧て數ふべからず。個様の身にて、何とて長壽を得らるべき。然れば禪師の論は其の理神妙なりと雖も、予が實際に取りて

は、孔先生の占ふ所能く其の當を得たるものと信ずと述べたり。雲谷つらく予が言を聞き畢りて、笑を含みて又曰く。信に然り。其は唯科第の事のみならず、世間に千金の財産を有する者は誠に千金の福相ある人なり。百金の財産を有する者は、誠に百金の福相ある人なり。路傍に餓死する者は誠に餓死の相ある人なり。天は唯其の人物次第に仕向け給ひて少しも依怙の沙汰に涉らず。されば子を生ずるが如きも、百世まで盡きせぬ徳を積みし人には、必ず百世まで絶えせぬ子孫を授けて之を保たしめ給ひ、十世まで盡きせぬ徳を積みし人には、必ず十世まで絶えせぬ子孫を授けて之を保たしめ給ひ、二世三世に亘れる徳を修めし人には、必ず二世三世に及べる子孫を授けて之を保たしめ給ふ。されば斷然と

絶えて子孫の無き者は徳の既に盡きて、福の至つて薄き人なり。足下の述べらるる如き薄福にては左もあるべき乎。併し茲に最も大切の法こそあれ、足下心を静めて能く聞かれよ。凡そ世人の過を改めて善に遷らざるは各々己が非を知らずして、みづから是なりと思ふが故なり。今足下は人の耻ぢて覆ひ隠すべき事をも打明けて能く其の非を語らる。此の公平の心を以て過を改めて善に遷るは掌を反すよりも易し。今より後勇猛心を振り起して、務めて陰徳を積み、務めて萬物を容れ、務めて慈悲を行ひ、務めて精神を養ふべし。此の志一決せば、是れ従前薄相の足下は即時に死にて、向後福相の足下は只今生るるが如し。之を道徳再生の身と云ふ。此の道徳の身ほど、能く天心に感格するものは非じ。太甲に曰く

華とは宿生既に定  
まれる業因であ  
る、だから今生の  
行爲は如何やうに  
も轉換し得らる  
事を云ふなり。

「天作孽猶可違。自作孽不可追」と。此の意は、天の作し給ふ孽は、己が身の行ひに由りては猶轉ずべし。己が作す孽は、決して追ふること能はずとなり。孔先生が科第にも登らず、子も生ぜず、壽命も五十三歳にて終ると占ひしは、此れ天の作し給ふ孽なれば己が行ひに由りて猶轉ずることを得べし。今より足下が勉めて仁心を擴め、勉めて善事を行ひ、勉めて陰徳を積むは是れ己が作す福なり。争でか之を享け得ざるべき。易經は聖人が君子の爲に、吉事に趨き、凶事を避くることを教へ給ひし書物なり。若し足下の信ぜらるる如く、天命が一定して移らざるものならば、吉事は如何にしてか趨くべき。凶事をば如何にしてか避くべき。其の開卷第一に曰はずや。「積善之家有餘慶。積不善之家有餘殃」と。

上來引く所の文言は、皆聖賢の格言なり。足下猶之に信服すると能はざる乎と云はれたり。

是の時予は從來の疑始めて晴れて、恰も生れながらの盲人が、眼開けて日月を拜するが如く、有難きこと骨髓に徹しければ、拜して其の教を受け、直ちに佛前に至りて從來の惡弊を一切懺悔し退きて願文一通を認めて先づ科第に登らむことを求め、善事三千條を行ひて天地に供養し、祖先に回向せむとの誓願を立てたり。

是の時雲谷、功過格と云ふ冊子一本を出だして、予に教へて曰く。自今以後足下が行ふ所の事を毎日之に記載せよ。善事を二つ行はゞ、則ち其の數を記し置け。而して惡事一つを行はゞ善の一つを引き去れよ。斯くの如くに積み行かば、其の數未だ三千に満

たざる中に、足下の願望成就せむこと疑ひなしと。

準提陀羅尼を常  
心にも信ずる  
然るに好し  
此の呪に信ずる  
明らば念佛  
好むれば念佛  
題目、光明眞言、三  
飯等、また、或  
心經、大悲、神  
消災、十句、神  
々々、如、陀、尼  
の如、勝、句、等  
きよき、心、神  
固き、好、明  
念ずる、好、明  
念ずる、好、明  
而も、好、明  
要る、好、明  
是れ、好、明  
黙して、好、明  
が、好、明  
宜し、好、明  
禪の、好、明  
其の、好、明  
す禪の、好、明

雲谷更に又、準提陀羅尼の文。「曩謔諷多南。三藐三沒汰。但臆南、怛爾也他。唵者禮主禮準提娑嚩賀」と云ふを予に授けて其の靈驗を説いて曰く。道家の説に、符を書く秘傳を知らぬ者の書きたる符は、鬼神に笑はると云ふことあり。其の秘傳は唯一念を動ぜざることなり。其の符を書かむと筆を執る時、一切の雑念を打ち捨て一念起らざる時に、初めて一點を下す。之を混沌開基と名づく。此の一點より一筆に書き納めて、其の間に一念の思想無ければ此の符能く靈驗ありとなり。凡そ天に祈禱し命を建立するには此の無念無想の處より感格するものぞ。孟子の曰く。「天壽不貳。修身以俟之。所以立命」と。是れ愚僧が信ずる立命の説の出所なり。

を熱心に明かに心  
讀すべし。

天とは短命の事、壽とは長命の事なれば判然二つなり。されど一念動ぜざれば天もなく、壽もなし。是の時初めて死生の命を立つべし。

譯者曰く。無名老人は、老婆深切に此の説を釋き下して曰く。凡そ長命を好み短命を惡むは、人間第一の煩惱なるを、之を貳にせずと云ふは其の惡む心と、好む心との二つを、棚へ上げてひたすら天道に打ち任せて微塵も超越し苦勞をせず、心を虚空の如くに持つを云ふなり。之を一念不動と云ふ。此の不動心は全く虚空と同様なるが故に虚空には生死の差別もなく、長命短命の沙汰も無きが如くに、此の不動心には一切差別の相無し。是くの如く、土臺の心を無念無想に押し開き置て、而して後徳



を修むるが眞實の功德なり。猶言はば一切の草木は大地あるが故に生ず。若し其の種子を虚空に置かば、陰陽妙なりと雖も、争てか生ぜしむることのなるべきぞ。されば心を空にするは、稟け得たる天命を抛ち棄て、取り付かせぬ仕方なること。種子を虚空に置いて、草木を生ぜしめぬ所作なるが如しと。云々。猶擴めて申さば豊かなると、歉らぬとは判然二つなり。されど一念動ぜざれば、貧も無く富も無し。是の時初めて貧富の命を立つべし。自由と不自由とは判然二つなり。されど一念動ぜざれば、貴もなく、賤も無し。是の時始めて貴賤の命を立つべし。凡夫の境界にては死生の二つを最も重しとするが故に、孟子は天壽の二つを擧げて一切の順境、逆境を總括し給ひしものぞ。次に身を修

めて以て之を俟つとは、是れぞ徳を積み、天に祈るの一大事なる。身を修むるとは、家屋の破損を職人が修理する如く、咎過ありて身の破損したるを、念を入れ根を詰めて修め治すことなり。次に之を俟つとは、斯くすれば壽命を興へ給ふらむ、斯くすれば幸福を降し給ふらむなどと伺ひ望むの念、願ひ迎ふるの意などを一切起さず、唯天道次第に打ち任せたるを云ふなり。此の地位に至りて一切動ぜざれば、求るが即ち求めざるにて欲界の中に在りながら、直に上天の境界に至るべし。學びて此の境界を手に入るを眞正の實學とは云ふぞかし。併し足下は此の無心の處には程なほ遠ければ、上の準提陀羅尼を心に誦持して、覺ゆることもなく、數ふることもなく、唯々間斷せしめざれ。是くの如く誦持して工

夫純熟すれば、持して居て持せず、持せずして持せられて、終には一念不動の處に到るべし。果して茲に至りなば、其の功德靈驗計るべからずと、説き示したり。

予しみる、此の説を聴きて立命の學に復一點の疑ひなく、即時に一心を翻しぬ。予初めは號を學海と云ひき。其は天下の川々皆海を學びて、終に海に至るの義を取りしなり。然るに是の日、其の學海は平々の凡夫にてありしことを、明らかに了りしゆゑ、即ち號を了凡と改めぬ。其はもとの凡夫の舊窠に、再び返らじとの己が心の誠なりき。

袁氏は只善惡因果の道理を明にしたのみであるから、未だ了であるから、猶生去來の佛の初入の門を信じ得

予此れより以來は、日夜に心いそぐとして大いに前日に異なるを覺えたり。前日は放任主義にて心かけ構ひなかりしが、爾來

られたのであり、知らるべし、代は此の理を信ずるもの、稀である。尊い事

は何となく慎み懼るるの意出て来て、聞き處に居ても、人の見ぬ蔭に在りても、悪行は無かりしか、惡念は起らざりしかと、常に天地鬼神の照覺を恐るるやうになりぬ。斯く天道に近づくに隨ひて、世の欲染は薄らげるにや、人が我れを憎み毀るに遇ひても、今は心持ち穩かに、安むじて其れを受け容るるやうになりぬ。斯くて其の翌年、京に於て選人に召し出ださるる時、老翁の占には第三番目とありしが、打ち越して第一に選ばれたり。是の時、禪師の立命の説を手ごたへして、身に占めたと同時に、易道の信仰は漸く醒めかけたり。されど猶我が身を省るに、誤りありがちにて、道を行ふこと純粹ならざりき。或は義を見て行はむとするも、勇氣に乏しく、或は人の難を見て救ひながらも、精神を入れず

易道に間違なし、氏の易道を見るに間違があつたので

或は身には勉めて善事をなせども、口には非法の言を云ひ、或は醒めたる時には操り守れども、酔て後には抛げ遣りにするなどの事ありて、勉め／＼て積みし善事も悪事の爲に引き去られて、空しく光陰を費したりき。されば己巳の歳に誓願を發せしより、己卯の歳に至るまで、十年を歴て漸く三千の善行を滿たせぬ。されど是の年は公用に奔走したりし故、翌庚辰の年になりて性空上人、慧空上人を請じて、東塔の禪堂に於て三千善行の回向をして、天地祖先に供養し、更に又子を求めるの願文を捧げて、又三千の善事を行はむとの誓願を發したり。然る處其の翌辛巳の年には、はや汝が生れたり。

予は一善を行ふごとに、一々功過格に記す。汝が母は無筆なり

し故、一善を行ふごとに、朱筆にて其の日の上に圈印を付けたり。其は或は貧人に物を施し、或は魚鳥貝類などの生物を買ひて放ちなどして、多き時には日に十餘圈を累ぬるに至りき。されば今度は、癸未の歳の八月まで、四年の間に三千の善行を滿たせぬ。是の時は諸上人を宅に請じて、三千善行の回向を勤めぬ。其の年の九月十三日、進士に召し上げられむとを求めて、一萬の善事を行はむとの誓願を發せり。然るに其の年より四年目の丙戌の年に、寶坻縣の令に命ぜらる。予其の時治心篇と名づけし白紙の冊子一本を作り置き、早朝に起きて裝束し、廳の廣間に坐れば妻之を持ち出でて給仕に渡して、卓の上に置かしむ。予筆を把りて、前日前夜に行ふ所の一切の善惡を微細に記し、夜は則ち庭上に卓を置

三寶と諸天は何れに  
掌にあつても常に  
が如く物體を見る  
玉ふ。敢て氏を召  
に習ふ。例に從へ  
れど心の功大なら  
んば治心の功大なら

この神宜の大精神  
南北の極みなり。  
思ひ合すべし。尊  
き事

小生も此一段を讀  
んで起死回生の思  
人。は食ひ過ぎて  
をる。美食過ぎて  
をる。謹むべし

夢事でない眞事  
べき餘地はない。  
更に一步を進め  
眞事は唯物的に  
氏は唯物的に陥  
過ぎて居つた。功  
徳の大小を必ずし  
のみ捕はれるは不  
可。みは心と知るべ  
し。本である切の

きて、上に治心篇を載せ、宋の趙闕道人に效ひて香を焚きて天に告ぐるを常例とせり。

或時汝が母、予が行ふ所の善事の數多からぬを見て、顔を擧めて申しけるは、以前宅に在りし時には、妾も相助けて善事をせし故、三千の善行も數年の間に満願したりしが、今は官邸の事なれば下様にも遠く隔たりて、善事の行ふべき者少なし。斯くては一萬の善事、何れの時にか成就せむとて、しみく〜と悲みけり。予之れを氣の毒に思ひたりしが、其の夜の夢に一人の神人を見けり。即ち敢て善行の成就し難きことを語りければ、神の宣く。汝之れを憂へなば、汝が糧一節を減ぜよ。然らば萬行一時に完からむと。蓋し予が知行は、寶坻縣の田地一畝に付きて、二分三厘七毛なり

しかば、其れを一分四厘六毛に減じて、其の旨を縣下に布達したりき。されど畢竟夢に見し事なれば、此の事果して萬行の功德に當るや否やは、頗ぶる不安心に思ひたり。

さる折柄に、五臺山の幻余禪師來訪せり。予夢の告げを語りて此の事宜しく信ずべきや否やと問ひければ、禪師の曰く。善心眞に切ならば、一行も萬行に當るべし。况や己が糧を、寶坻縣百里の六町に當る。四方の民に與へて育て養ふことなれば、其の功德の萬善に當ること、何の疑ふ所かあらむと、云はれき。其の後萬善漸く圓滿しければ、此度は餘程の俸金を入れて、五臺山にて一萬僧を供養して、一萬善の回向を勤めぬ。さて孔先生は、予が命は五十三歳の八月十四日、丑の刻に終ると云ひたりしが、予は曾

て壽命の壽はせざりしに其の歳何の惱みもなく、今六十九歳に  
なりぬ。

書經に曰く。「天難、謀命靡常」と。又曰く。「惟命不于常」と。

是れ皆其の人の所行に因て、天命の定まり無きを云ふなり。され  
ば禍福己れより求めざるもの無しと云ふが如きは、實に聖賢の言  
にして、禍福唯天の命ずる所のまゝなりと云ふが如きは、是れ世  
俗の論なり。此の義に於いては、予親しく其の味ひを嘗めたれば  
今より後立ちて證人とならむ。

汝は猶若輩にして、修行も未熟なれば、汝が天命は知り難し。

若し天運に因りて、高位高官に登らば、常に零落したる時の思ひ  
を作せよ。若し又萬事意の如くならば、常に困難なる時の思ひを

決然、因果の理は  
にして、固定的でな  
ず、活動して昇沈的  
に活動して止まらな  
いと知るべし。

忘れるな。若し人に愛敬せらるる身となりなば、常に冥加の思ひ  
を作せよ。若し世に尊重せらるる家となりなば、常に卑下の思ひ  
を忘れるな。若し學問上達しなば、常に猶未熟の思ひを作せよ。  
念々斯くの如くに、懼れ慎みて、上は國家の恩に報いむことを思ひ、  
下は家門の福を増さむことを思ひ、外は人の急難を濟はむことを思ひ、  
内は己が邪曲を閑がむことを思ひ、日々に己が非を知り、日々に己  
が過を改めむことを勉めよ。凡そ一日非を知らざれば、一日過を  
遂ぐるなり。一日過を遂ぐるは、一日善行を後しざりするなり。  
天下に聰明豪傑の人無きに非ざれども、徳行修まらず、功業廣ま  
らずして、一生を一定の天命に任せ了る者の多きは、畢竟因循に  
して、非を知り過を改るの勇氣なきが故のみ。雲谷禪師が授けら

れし立命の説は、實に至精、至邃、至眞、至正の天理なり。汝熟慮玩味して、勉めて之を行ふべし。みづから日を曠くすること勿れ。

謙 虚 利 中

譯者曰く。謙は慙にへりくだることなり。虚は胸に一物をも介せず、むなしくして力みなきことなり。利中とは、中心を利通すると云ふ意味にて、汚き心、邪なる念なきを奇麗に洗ひ去りて、心の中を覗き見られても、障る物なきやうに、掃除するこゝなり。總ての人、他人に對すれば世間の習ひとて

表面は慙にへりくだれども、心の底より謙りて、腹に邪魔なきものは少なし。心誠に謙りて腹に一物なきときは、其の色おのづから外に顯はれて、何となくしほらしきものなり。之を謙虚云ふ。之に反して、腹の底には慢心を蓄へながら、形は口ごのみにて、慙らしく謙るものあり。之を卑下慢と云ふ。傍にて見聞するも惡らしきものにて、神明佛陀は、特に厭ひ惡ませ給ふよし。されば形は心内外一致して、胸の上より腹の底まで、一物を介せず、障りなく見透さるる如きを、謙虚利中は云ふなり。

易に曰く。「天道虧盈而益謙。地道變盈而流謙。鬼神害盈而福謙。人道惡盈而好謙」と。盈とは、物の十分に満つることなり。人に取りて言はば、我れは伶俐俊發なりと思ひて、凡庸の人を侮り、我れは學者知識なりと思ひて、文盲の人を凌ぎ、我れは富貴なりと思ひて、貧賤の者に驕り、我れは美麗なりと思ひて、醜陋の人

に矜ほこるなどが、皆盈みなみちるの義なり。謙へりくだるとは、物の十分に足たらはぬことにて、即ち謙虚けんきょの義なり。

さて天道は盈みちるを虧かきて謙へりくだるに益えきすとは、夕の月も、三日月に虧かけてある間は漸々益まして満月となれども、既に満月と盈みちぬれば、漸々虧かきて、終には弓張月となす。春の暖氣も、虧かけてある間は、漸々益まして夏の暑氣となれども、既に大暑と満みちぬれば、漸々虧かきて、又冬の寒さむさとするが如き、此の一例なり。地道は盈みちるを變じて謙へりくだるに流ながるとは、土も、水も、高き方を嫌きらひて漸々卑ひくき方に流れ赴おもむく故に、丘も山も、霜に崩くづれ、雨に打たれて、漸々河や、海やに流れ込こむが如き、此の一例なり。諺に、出る杭は打たると云ふは、此の事を斥さすぞかし。

次に鬼神は盈みちるを害がいして謙へりくだるに福さいはす。人道は盈みちるを惡にくみて謙へりくだるを好このむとは、凡そ學問道術がくもんたうじゆつの上にて、才智藝能さいちげいのうの業わざにても、上を仰あふげば限り無なきものなり。然るに己が少々他に勝すぐれたりとて、其れを鼻はなに懸かけて、人を凌しのぎ侮あなるは、此の上もなき無禮なる業わざなり。何となればいかほど人に勝すぐれたる才能學術さいのうがくじゆつにても、高慢我見かうまんがけんの者は、徳に背そむきたる凶人きようじんなり。又上を仰あふげば限りなきことをみづから知らざるは愚人なり。之に反して學問學術がくもんがくじゆつの乏とほしき人、才智藝能さいちげいのうの下れる人は、我れは無學無藝むがくむげいなる者なりと。みづから心に耻はづる故に、毫すこも高慢我見かうまんがけんの心なし。されば學術才能がくじゆつさいのうの勝すぐれたる人に對するときは勿論、世間一般の人に向むかひて自然に謙退けんたいして謂はゆる謙虚利中けんきょりちゆうなる有徳の人となるものなり。然るを彼の高慢かうまん

者は、彼れが如き凶愚の身を以て、此くの如き有徳の人を侮り凌ぐこと、豈大いなる無禮に非ずや。況や富貴の人が邸宅衣服に華美を盡くして、貧賤の人に見せ付け、酒宴遊興に歎樂を極めて其れを矜り樂むなどは、常人の眼より見ても、心憎く頬憎まるる業なるを、況て矧や、清淨純潔にして萬民を一子の如くに思召す、神明の看そなはして之を如何にぞ、憎み嫌はせ給はさらむや。之を如何にぞ、睨み叱らせ給はさらむや。鬼神は盈るを害して謙るに福す、人道は盈るを憎みて謙るを好むとは、此の事を云ふぞかし。

又書經に曰く。「滿招損謙受益」と。此の意は、滿心なる者は天地鬼神と、人とに惡み立てらるる故、何角に付きて損なる事

み出て來るなり。然るに滿心者は我が心得の天理に背く故に、斯く損を招くとは思はて、反て我れ程の者に近來不幸の打續くは何事ぞと逆さまに天地を怨み、鬼神を尤むるやう成り行くからに、彌々以て損を招く事とはなり來るなり。之に反して謙遜なる者は天地鬼神と人との哀憐せらるる故、何角に付きて益なる事のみ出て來るなり。然るに謙遜者は我が心得の天理に叶ふ故に、斯く益を受くるとは思はて、反て我が如き不徳の者に斯く幸福の降り來るは、全く神佛祖先の御蔭ならむと、己が神妙を逆さまに、天地鬼神に回向するからに、彌々以て益を受くる事とはなり來るなり。之を滿は損を招き、謙は益を受くとは云ふぞかし。

又易六十四卦の中に。六爻とも皆吉なるものは、唯地山謙の卦



一卦あるのみなり。如何にとなれば、地は下に在りて山は上に在るが世界の常なるに、此の卦のみ山の高き位を持ちながら、謙りて卑き地の下に居るが故に、是の故に、地山謙と名づくるなり。動くとして、之くとして皆吉ならざるは無きなり。

予縣學、府學、州學に在りて、つらく貧生の出世する者を見るに、必ず謙虚なる風采の手に掬るばかりに、一際目だちて見ゆるものぞ。今其の二三を引きて現證を示さむ。

辛未の歳の計偕に、譯者曰く。計とは會計の事なり。當時は各地方官三年に一度づつ、京都へ會計に上る制なり。偕とは同道の意なり。地方官が上京の次に、及第に試験せらるる諸生を引き連て上るなり。故に之を計偕と云ふ。嘉善名地より予と共に上京せし諸生は十人なりしが、其の内の丁敬字は、年最も少くして、最も謙虚なる性質なりき。予之を見て、費錦坡名人に語りて曰く。「此の人は

今年必ず及第せむ」と。費錦坡曰く。「足下何を以てか之を知る」と。予が曰く。「我れ聞く謙虚の者は必ず福を受くと。看られよ十人中に、敬字が如く誠實にして物和らかなる者有りや。敬字が如く人にも先だゝず、淳にしてそらさざる者有りや。敬字が如く、物事を大事大切に、内ばなる者有りや。敬字が如く、侮りを受けて返報せず、謗りを聞きて言ひ譯せぬ者ありや。我れ聞く、是くの如き人は、天地鬼神之を佑け給ふと。されば人能く之を引上ぐるを知る」と云ひき。果して其の時の撰びに中りぬ。

馮開之は、幼年の時には強情者と思ひしが、丁丑の歳、予が京に在りし時には、はや及第して居ければ、甚だ不思議に思ひしが交際して見れば、果して能く心を虚にし、容を恭くして、大いに

幼年の習慣を一變したりき。

李霽岩は正直にして、律義なる益友なりき。折々差向ひにて、其の人の非事を攻むるに、いかにも虚心平氣にて、予が異見に喜び順ひて、未だ嘗て一言の口對へせしこと無し。予乃ち之に告げて曰く。人の福を受くるは、必ず福の本始あり。人の禍を受くるは、必ず禍の根元あり。足下の謙虛なる、天の助け給ふこと必定なり。今年は決めて及第せられなむと云ひしが、果して予が言の如くなりき。

趙光遠は山東冠縣の人にて、郷學よりは童年の時に撰擧せられて、久しく及第せざりけり。其の父嘉善名地の三尹官となりければ、隨ひて父の任所に赴き、其の地の錢明吾先生を慕ひ往きて、

己が作れる文章を示しければ、先生一讀して散々に添削し、遂に一枚の反古となしぬ。光遠は少しも怒れる色なきのみならず。却て心服して其の添削通りに改めたりき。斯かる謙虛なる徳を修めし故にや、其の翌年は遂に及第したりき。

壬辰の歲。予參内して貢士夏建所に出會ひし故、つらく其の人たるを見るに、胸に一物なく、腹に力みなくして、謙虛の光り人を照らせり。予歸りて友人に告げて曰く。凡そ天斯の人を發達せしめむとする時、未だ其の福の蓋を開かざる前に、先づ心の蓋を開く。此の蓋一たび開くる時は、浮氣の者は貞實になり、遺放しの者は引締り、父兄を親まず、神佛を敬はざりし者は、必ず深切信心の者となるなり。今夏建所を見るに、心の蓋既に開けたり。

及第近きに在らむと云ひしが、果して其の言の如くなりき。

江陰の張畏岩は、學問の博き文章の工みなる、學者社會に名高き人なり。甲午の歲。南京の鄉學試験に自慢の文章を作り出だして、其の身は或る寺に寓したり。其の日になりて、及第の揭示榜を見るに、己れが名無かりしかば、大いに怒りて此の判者は辟目なりと。散々に罵詈せり。時に一人の道人、傍より其の體を見て笑を含みて晒ひければ、畏岩忽ち道人に取りて掛りて、「汝何とて斯くは無禮なるぞ」と云ふ。道人曰く、「我れ足下の自慢の文章の決めて佳からぬことを笑ふなり」と云ひければ、畏岩ます／＼怒りて、「汝我が文章を見もせて、何とて其の佳からざるを知るぞ」と責む。道人の曰く、「夫れ文は、己が心を書き出すものなれば、

志氣溫和にして七情共に平かなるときは、其の文おのづから美しきものぞ。今足下の判者を罵詈せらるる辭を聽くに、胸中甚だ平かならず。斯かる不公平の心を書き出だしし文なれば、某は未だ見ざれども、既に其の佳からぬことを知れり」と答へぬ。畏岩もさすがの者なれば、此の確言に我を折りて、大いに道人に屈服し遂に就て教を請へり。道人曰く、「人の吉凶は、一定の命數あり。足下此の度及第すべき天命ならば、文は工ならずとも榜に上るべし。及第すべからざる天命ならば、文は工なりとも榜に上らず。榜に上ると上らざるとは、天命に在りて文章に在らざるなり。足下必ず及第せむとならば、先づ天命を移し易へよ。然かすれば、必ず得らるべし」と教へぬ。畏岩曰く、「既に一定の天命あらば、

安心して打任すべし。然るを移し易ふるとは如何に」と問ふ。是に於いて道人懇々と説て曰く。「古人言はずや。造命者天。立命者我と。此の言は、天命は我れより建立して、其の建立したる通りを、天より印可し給ふものぞとなり。之を家を造るに材木を集むるに譬ふ。其の材の大小美惡によりて、大家、小家、美宅、美宅を、天より造り給はるなり。足下從來の不公不平の惡材を打ち棄て、新たに謙遜虚懷の良材を積み集めなば、天道造化の大工、いかてか其の良材を使用して、大廈高閣の美館を造り給はらざらむや。天命一定とは、米を植て米を得、麥を植て麥を得るを云ふ。さて其の米を植るも、麥を植るも、我が心次第なれば、米を植れば米に改め、麥を植れば麥に改めて、其の收穫を與へ給ふを、天

命靡常とは云ふなり。されば足下も今より勉めて善事を行ひ、廣く陰徳を積み、謹み謙りて天命を移し易へなば、如何なる福か得られざらむとぞ教へける。

畏岩又曰く。「懇々の慈教、道理には服すれども、我れは貧儒なり。如何してか錢を得來て、善事を行ひ、陰徳を積むべき」と。

道人曰く。「善事陰徳は必ずしも物を施すのみに限らず。心の用方ばかりにて無量無邊の功德あり。謙虚の一事の如きは、一錢を費ずして、普く世間に財物を施すことを得べし。夫れ美衣を着、美味を食ひ、美屋に住み、美器を弄びて、人に負けじと競ひ争ふを僣慢と云ふ。此の僣慢は深き仔細ありて、世界の人鬼神への無禮となるなり。此の僣慢の反對を謙虚と云ふ。されば謙虚は、

一切の事物を人よりは内ばく、と謹み守ることなり。道士の山林棲居、佛者の三衣一鉢、みな謙虚の修行なり。されば美服を着かねぬ人が、一日美服を着ざれば、一日其の美服を世界の人天鬼神に供養するに當るなり。美味を食すべき人が一日美味を食せざれば、一日其の美味を世界の人天鬼神に供養するに當るなり。大廈高閣を建てかねぬ人が、小屋に住するは、一日、一月、乃至一十年、幾十年の間、其の大廈高閣を、世界の人天鬼神に供養するに當るなり。其の他我が身の奢るべき事を止めて爲ざるを、其の奢るべき事物を、皆世界の人天鬼神に供養するに當るが故に、遂に一錢の費なくして、施行の功德は天地の間に満つるものぞ。足下何ぞ速に己が心の傲慢を改めて、個様の善徳を行はざる」と云へり。

畏岩之を聞て大いに感悟し、我見を折り我慢を棄てて、日々善事を行ひ、夜々に徳行を勵みたり。

丁酉の年に至りて、或る夜の夢に偶々高き潔き一室の内に至り見れば、中に試験の帳簿一冊あり。畏岩之を披き見れば、處々に抜けたる行の多かりければ、怪みて之を傍の人に問ふに、其の人の曰く、「天上の科第は三年に一度づつ行はる。人間にて及第すべき者は、皆此の帳簿に登録せらるるなり。されど登録せられて後に、行を汚し、徳を損することあれば、其の姓名を削り去らる。此の抜けたる行の多きは之が爲なり」。又其の末の名の無き一行を指して曰く、「汝三年已來身持頗る慎めり。因て此の一行には、決

めて汝が名を録せらるべし。自重自愛せよ」と。畏岩其の人員を員ふるに、第百五人目なりしが、其の年の選みに果して百五人目に擧げられたり。

さてつらく上の事實に由りて考ふれば、眼にこそ見えね、頭上三尺の處には決めて神明歴然たれば、凶事を避け吉事に趨くと、斷然我が所行の善惡に由れり。されば須く善心を相續し、惡行を禁制して、少しも天地鬼神の憎みを受けず、虚心を心とし、謙遜を意として、常に天地鬼神の憐みを蒙るべし。斯くてこそ始めて纔に福を受くるの基とはなるべけれ。

古語に曰く。「有志于功名者必得功名。有志于富貴者必得富貴」と。此意は、功を國家に立てて名を末代に揚げむと志を立つ

る者は、必ず其の功名を遂げ、又富貴ならむと志を立つる者は、必ず富貴の人とならるとなり。其は其の志の堅固にして撓み怠ること無きに由るなり。人の志あるは猶樹の根あるが如し。樹は根に由りて成長し、人は志に由りて發達す。されば人は志を樹の立根の如く、確乎不拔に突き立て虚心を心とし、謙遜を意として自然に天地を感動せしむるに至るべし。今の及第を求むる者は、初めより此の確乎たる志あるに非ず。中れば好し、中らざれば止むと云ふが如き一時の慰事に過ぎず。斯かる浮氣の所存にて、何とて立身出世せらるべき。孟子は齊の宣王が俗樂を好めるに答へて、王も浮氣の所存を止めて、本心に樂を好み給はば、其れにて齊の國は太平ならむと云はれしが、予は及第を求むる人に對して、足



永く靈廟の祭りを饗け給ひ、子孫長く祖先の福を保ち給ひし故、孔子も其れを賛歎して、「徳爲聖人。貴爲天子。富有四海之内。宗廟饗之。子孫保之」と宣へり。今は予が見聞せる近年の事實を引きて之を證せむ。

建寧府の楊榮は、世々貧家にて渡し守を業とせり。或る時霖雨打ち續きて、溪水大いに漲り、多くの民家を押し流して、溺るる者ども數知れず流れ下りければ、其の邊の人々は小舟に棹さし出でて、我れ劣らじと家財貨物をぞ撈ひ取りにける。然るに楊榮が曾祖父と祖父との二人は、財物には目も觸れずして唯人のみを救ひ助けければ、他の人々は馬鹿者なりとぞ嗤ひける。されど自然に家榮え來て、楊榮が父の生れし時には餘程裕かに暮しけり。或

る時異人來り告げて曰く。汝が祖父は陰徳を積みたり。子孫必ず貴顯に登らむ。宜しく墓地を某の地に定むべしと云ひければ、指圖通りに定めき。即ち今の白兔墳と云ふ塚是れなり。楊榮生るるに及び、果して二十歳にて及第して、遂に天下の極官たる三公の位に升り、父は無論、渡し守なりし祖父にも曾祖父にも、皆三公の官を贈りて先祖の光を輝したり。且其の子孫皆貴く榮えて、今に至るまで賢者多きぞかし。

隴縣の楊自懲は、最初其の縣の小吏にて、心懸慈悲深く捌き方公平なりき。其の時縣の長官、甚だ嚴格なりけるが、或る時一の罪人を撻つに、血流れて前に滿れども、怒猶息まさりければ、自懲其の前に跪き、心を盡くして詫び宥めぬ。長官曰く。「此の者法度



を越え、道理に悖る。斯かる者に怒らずば、何者にか怒るべき。」と云ふ。自懲首を地に摺り付けて曰く。「吾れ之を古賢に聞く。上其の道を失ひて、民離散すること久し。されば罪人を吟味して、其の罪に落ちたりとて、只不便と思ふべし。手柄と思ひて喜ぶこと勿れと。喜ぶさへ猶戒め給へり。況や怒るをや」と。言葉を盡くして申しければ、長官も理に服して、怒の氣色霽れにけり。斯かる心得の人にて、他の餽物などは決して受けざりければ、家固より貧にして、飯米をだに闕きぬること屢々ありき。されど囚徒の食物乏しき時には、種々方便して之を濟ひたり。或る日新參の囚徒數人、食に饑る折節、家にも米乏しくて囚徒に與ふれば、家内は食ふこと能はず。家内に食へば、囚徒に與ふること能はされ

ば、いかゞはせむと其の妻に相談せり。妻の曰く。「囚徒は近邊の者なりや。遠方の者なりや」と。自懲が曰く。「遠方なる杭と云ふ處より來れり。道中より饑を忍びて、顔色さながら菜の色の如し。」と云ひければ、妻もさらばとて家内の食ふべき米を、残らず粥に煮て、悉く囚徒に食はしめたり。平生の慈悲斯くの如くなりき。其の後自懲子二人を設けたり。長男を守陳と云ふ。是れは北京の吏部侍郎となる。次男を守趾と云ふ。是れは南京の吏部侍郎となれり。又孫二人ありて、長孫は刑部侍郎となり、次孫は四川の廉憲となりて、子孫四人とも當時の名臣とぞ稱せられける。今の名高き楚亭德政も亦自懲の後裔なるぞかし。

昔正統年中に、福建の鄧茂七と云ふ者亂を起して、沙縣より延

平までの州郡を打ち靡けければ、士民の之に従ふ者甚だ多かりき。依りて朝廷より隴縣の張楷と云ふ人に征討を命ぜられければ、やがて計を以て賊茂七を生捕たり。されど餘黨猶多かりければ、其の後布政司寮の謝都事と云ふ人に、大軍を授けて、賊の餘黨を殘らず搜り殺すべしとぞ命ぜられける。然るに此の謝都事は、仁者にてありければ、願くば多くの人を損せず、鎮定せむと思案の半、幸に賊の黨類の名簿を得てければ、此の名簿に載らざりし人民には密に白布の小旗を授け、我が大兵を引率して到らむ日に、此の旗を門口に挿み置くべしと申し聞け、又味方の軍兵には、妄に人を殺すこと勿れ。白旗の挿したる家には、決して犯し入ると勿れと、固く戒めて軍を統べければ、之に依りて全く助けられ

し者一萬人に及べりとぞ。さて後謝都事の子謝遷は、第一の及第に撰ばれて、遂に宰相の官に升り、其の孫謝丞も亦及第して、探花郎と云ふ第二番の科にぞ撰ばれにける。

同じ福建の林氏の祖先には、甚だ慈悲深き老母ありけり。常々團子を作りて人に施し、乞ひに来る者には、手づから之を與へて曾て倦める氣色も無かりき。一人の異人あり。此の老母の施しは誠の慈悲なるか、名聞の慈悲なるかを試験せむとて、毎朝來りて團子六つ七つを求め食ひけるに、老母は日々快く之を與へて、三年を終ること一日の如くなりき。乃ち其の誠なることを知りて、老母に語りて曰く。吾れ三年の間、汝が團子を食へり。何を以てか汝に報いむ。汝若し死せば、府廳の後に好き地あり。必ず彼處

に葬るべし。然らば汝が子孫の官祿を得るもの、麻の子一升の數に至るべしとぞ教へける。其の子其の差圖の處に葬りしかば、其の一代に立身出世せしもの九人あり。其の後代を累ぬるに隨ひて高位高官に升る者ますく、夥しく、終に福建に於ては林氏の一門に及第せざるもの無しとの謠を歌ひ囃すに至りき。

馮琢庵の父、若くして邑の學校の書生たりし時、冬の朝早く起きて學校に赴く途中、一人の雪中に倒れたるものあり。手にて撫でて伺へば、既に半は死したりき。乃ち不便の事に思ひ、自分の衣服を之に着せて、扶け歸りて救ひ甦らしめたりき。或る夜の夢に、神人來り告げて曰く、汝人の一命を救へり。是れ至誠の一心より出づ。吾れ其の褒美として韓琦を遣はして汝が子とせむと云

へり。譯者曰く。韓琦とは宋朝の賢臣、衛國公の事なり。古後、子琢庵を生みし時文眞實中の畫錦堂記は此の人の賢徳を述べしものなり。

夢の告げに由りて、馮琦と名づけたりしが、生長の後果して太史の官に升れり。汝が知る所の馮琢庵太史是れなり。

常熟の徐鳳竹が父は、素より富める人なりき。或る年飢饉なりければ、租税を残らず小作に免じて同邑の富農にも、之を勧め誘ふのみならず、米穀を出して大いに貧民を賑はしたりき。徐鳳竹郷選に中れり。之に依て其の父益々徳を積むこと怠らず、或は橋を架け路を造り、僧に施し衆に諭し、凡そ世の利益となるほどの事に心を盡さざるは無かりき。鳳竹都堂の官に升り、後浙西と浙東との兩巡撫使にまで進みける。

嘉興の屠倍公は、初め刑部の主事たりし時、監獄中に宿直して

委細みこまに囚徒しうとの實情じつじやうを聞きたりしに、無失むしつの罪つみにて囚とらへられたる者若干人を見出して喜ぶこと限り無し。されど其れを自分の功とせず、密々に其の事を書き認めて、上官の刑部尙書へと差出だしける。さて拷問の時に及びて、尙書、僖公の上書の旨を以て吟味しければ、囚徒皆其の要點を指されて實事を白狀せざる者無く、理非明かに分りて無失の難を免るる者、十餘人に及びければ、當時都下にて一般に、尙書の明智をぞ頌めたりする。是れ其の實は、昔僖公の深く隠して尙書の明智とは云はしめしなり。僖公又た此の際に乗じて、尙書に上申して曰く。今朝廷御膝下の監獄すら無失の罪に陥る者多し。況や四海の廣き萬民の多き争てか冤罪に苦しむ者の無かるべき。拙者が愚見にては、宜しく五年に一回づつ天下四方に減刑の官を差し遣はして、

地方官吏の治罪の實況を、明白に糾明し給はば、廣大の御慈悲ならむとぞ具申しける。尙書も尤と同意して、其の議を朝廷に奏聞しければ、朝廷にも尤と思召して、速に其の議を允可せられ、僖公も即ち其の減刑官の一人に撰ばれて、一地方にぞ遣はされける。或る夜夢に、一人來て僖公に告げて曰く、汝が天命は子無かりき。然るに此度の減刑の議、深く天心に合へり。之に因て、天帝汝に三人の子を與へ賜ふ。皆高位高官に升るべしとぞ申しける。其の夜夫人妊娠せり。後果して應墳、應坤、應垓の三子を設けて皆顯官にぞ進みける。

池陽の包太守は、子七人あり。第七子の包憑、字信之は平湖なる袁氏の壻となれり。吾が家と同姓の故にや、此の信之は吾が父

と最も親しき朋友なりき。此の信之博學高才の人にて、屢々選舉せられしかども、いかがの譯にか及第せざりき。又平生心を道學に留めたりしが、或る日泖湖と云ふ處に遊びて、不圖一の寺院に到りけるに、觀音の像の雨露の漏る處に、そぼ濡れて立ち給へるを見たりければ、あな勿體なやと思ふ情おこりて、囊中より金十兩を取り出だし、之を住持の僧に渡し、觀音堂を修繕してよと乞ひければ、僧は修覆大いにして金少し。是れにては落成覺束なしと云ふ。信之さらばとて、又荷物の中より松布四匹、衣類七品を取り出だして與へぬ。其の時僕進み出でて、七品の内麻の袴は新調の儘なり。残し給へと云ひければ、信之は菩薩だに雨露に濡れ給はずば、吾れは赤裸にても苦しからずと云ひて、残らず僧に

ぞ與へける。僧之を聞て涙を流して曰く、金布および衣類を施すは、さのみ難き事に非ず。只今一言の誠心のみは、世に有り難き思召なり。いかにもして心願成就なさしむべしと云ひけるが、後果して結構に出來せり。されば信之は、吾が父と共に參詣して、其の夜一泊せられければ、伽藍の守護神、信之が夢に入り來て謝して宣はく、汝が子孫世々官祿を享くべしと、其の後果して子の包汴、孫の樛芳、皆及第して、顯官となりしこと遠き事には非ずかし。

嘉善の支立の父は、刑事の官吏なりしが、囚徒に罪なくして死罪に窮まる者ありければ、心深く之を哀れみ、何とかして命を救はむと取り繕ひたり。或る時其の囚徒、妻の食を送り來るに語り

けらく、支公の我れを救はむと心配し給ふ厚意、報いるに道なし。願くは明日支公を我が宅へ招待して、饗應の上、汝身を穢して支公に事へよ。支公若し肯ひ給はば、我が命助かるべしとぞ論しける。妻も夫が生死の大事なりければ、泣く命に従ひけり。さて翌日支公至りければ、妻みづから出でて酒を勧め、具に夫の意を告げて、側近く事ふれども支公は妻の心に従はざりき。されど彼の者の爲に力を盡くして、終に死罪を遁れしめぬ。彼の者獄を出づるに及びて、夫妻ともに支公の家に至り、頭を地に摺り付けて謝して曰く、公の如き厚德は近世に有るべからず。世上に取りては道徳の師なり。我れに取りては命の親なり。何を以てか之に報いむ。唯公既に中年も過ぎ給ふに、猶御子無し。我れに一人の娘あ

り。願くは公の召使に奉らむ。公已に我が命を助け給へる陰徳あれば、助けられたる某が娘を召し給はば、必ず御子を設け給ふの陽報あらむ。是れ天理の感通すべきものに非ずやと申しければ、支公も一子を欲く思ふ折節、實にもと思ひて禮を備へて迎へ取りしが、果して支立を生みけり。此の支立が二十歳にて甲第に登り終に翰林孔目の高官に至りき。支立が子支高、支高が子支祿、孰れも顯はれて大學博士の官となれり。此の頃は支祿が子大倫も、甲第に登れること皆汝が知る所の如し。

凡そ此の九人の行ふ所、各々同じからざれども、歸する所は皆善事にて誠に善を爲す者の良き手本なり。之に就て善を爲すの心得を示さむ。善を爲すに二様あり。其の爲す善を人に知られぬ

やうにするを陰徳と云ふ。人の知る知らぬに拘らず、唯善事とさへ知れば、微ばかりの事をも打ち捨てず、饑ゑたる者の食を求むるが如く、務め行ひて飽くことを知らぬを積徳と云ふ。積徳にもあれ、陰徳にもあれ、其の時々に自分の心を吟味しつつ眞實の誠より出て名聞の假に流れぬやうに、勉め進みて怠ること無ければ罪障を滅ぼして、幸福を招くことは是れより早道なるは無し。

只世間に財力あり、勢力ある者は、善を爲すこと易し。易くして爲さざるは、我れと我が身を暴ふものにて、みづから富貴を擲げ棄つる者なり。易くして愈々爲すは、是れ錦の上に花を添ふるが如し。此の上の美きことやあるべき。之に反して貧賤なる者は善を爲すこと難し。難しとて爲さざるは、我れと我が身を棄つる

善悪とも心にあれば本  
富者とも心にあれば本  
事爲し易し心なれば本  
善を爲し難し心なれば本  
深く是を思へ。

善を取らず人善人を  
氣を取らず人善人を  
者を氣取らず人善人を  
善信は邪信でそのば道  
悟道は邪信でそのば道  
決して自他のため  
にも正道のため

ものにて、益々貧賤に飛び入る者なり。難きに勇みて爲すは、一善百善に當るべし。富者の萬燈より貧者の一燈と云ふは是れなり。尙此の上の心得は努めて善を爲しつつみづから善人を氣取らず、少しも善人顔をせざる事なり。之を最上の善人となす。只々事に觸れ縁に随ひて人を助け衆を濟ふべし。凡そ善を爲すの類數多あれども、其の大要を約めて言はば、十箇條とやなりぬらむ。第一に人と與に善を爲す。第二に愛敬心に存す、第三に人の美を成す。第四に人に勸めて善を爲さしむ。第五に人の危急を救ふ。第六に大利を興建す。第七に財を捨てて福を作す。第八に正法を護持す。第九に尊長を敬重す。第十に物命を愛惜す。是れなり。

第一に與人爲善とは、言を以て其れと顯露に云はず。人々の中

に打ち雑りて、何となく誘ひ導くことなり。昔虞舜と云ふ聖人の水邊に居住し給ひし時、其の處の漁民どもが爲す業を見給ふに、壯き者は老人を押し退け、強き者は弱人を打ち凌ぎて、魚の多く集まれる潭澤の好き處を、我が漁場と占め取りければ、老人弱人は爲む方なく、淺瀬急流などの魚の少き處に立ちて、漁を營むからに、常に魚を捕ること能はざりき。虞舜は之を見て、いとど不便の思ひを爲し給ひ、みづから其の漁者どもに打ち雑りて、魚を捕り給ふに、老人或は弱人をば、魚の多く集る方へ導き遣りて、多くの魚を獲させ、自身は魚の少なき處に就きて、日々少しばかりの魚を取り給ひき。其の中強情を張りて、人と争ふ者あれば、兎角見ぬ風聞かぬ體をして、匿して他に談し給はず、中に口ばか

りにても、正しき事を云ふものあれば、其の尾に付きて大いに譽めそやし給ひ、又其の中に虞舜の行ひを見眞似て、假初にも譲りいたはる者あれば、痛く感じ入りて譽めあげ、之を手本に押し立てて、他の者どもを教へ勵まし給ひしかば、一年の後には、其の處の老若男女、みな其の徳に靡き順ひて、互に好き場處をば人に譲るやうになりしとぞ。此の虞舜、或る時在所に栖遲して、百姓どもと耕作をし、又ある時は市中に住居して、陶器師どもと陶器を造り給ひしことありしが、いつも此の手段を以て、其の在所市中の住民どもを、悉く善道に導き入れ給ひしとなむ。夫れ聖人の智慧辯舌を以て、衆人を教へ導き給はむには、説論にても事足りぬべきを、言論を以ては教へ給はず、其の身を親しく愚痴蒙昧者



の中に打ち込みて、行ひを以て之れを薰陶し給ふこと、實に聖人が自心を苦め給ふ所なるべし。之を與人爲善とは云ふぞかし。聖人すら斯くの如くに苦心し給へば、吾等凡夫の世に處するには、己れ年長なればとて、人を侮るべからず。己れ善を爲せばとて、人の惡を現はすべからず。己れ藝能あればとて、人に銜ひて猜ますべからず。己が才智をば收め藏して、無きが如く虚きが如くすべし。人の過失あるを見ては、しばらく己が胸へ納め容れて、露顯せぬ様に掩ひ隠し、其の中に氣が付きて、みづから耻づる様に誠を致して改めしむる様に運ぶべし。又人に少しの善事善行あるを見れば、己が見識をば翻然と捨てて、其の善事善行に賛成し、且之を人に譽めそやし、世に取り囃して押し立つべし。是れ皆與

の愛と敬とは、世道  
を佛上の神佛は、  
一切の類を愛敬し  
下切の類を愛敬し  
す其の善あるを愛  
し其の事と哀憐す  
愛敬する惡を  
行ありば  
にあり

人爲善の行ひなり。凡そ日用の間に、一言を出だし一事を行ふにも全く我が身勝手の思はくを起さず、及ばぬまでも世界の師匠、萬物の手本とならむと勉め行ふぞ、實に天下大人の度量にはありける。

第二に愛敬存心とは、愛とは仁の事なり。敬とは禮の事なり。存心とは、常に恒に心に持ちて忘れぬ事なり。凡そ君子と、小人と、其の行跡に就て觀れば、事に當りて節義を致し、得るに臨みて廉潔を守り、或は文章を立派に書き、或は政事を上手に執るなど君子は固より之を能するが、小人とても亦之を能するものありて君子と小人と、常に打見たる所にては、甚だ混じ易きものなり。唯一の存心とて、平生心の居る處に至りては、善惡の相隔つるこ

と判然として黑白の相違あり。されば孟子も君子の人に異なる所以のものは、其の心を存するを以てなり、と云はれたり。此は君子は常に本心を主として、一切の事を本心より運び出だし、小人は常に私心を主として、折々本心を使ひ廻はすものなれば、君子と小人との判然たる分ちは、平生の心の居る處に在りと云ふ意なり。然らば君子の心の居る處はと云へば、仁と禮との二に在り。仁とは一切の人を愛すること、禮とは一切の人を大切に思ふことにて、仁は天の心なり、禮は地の法なり。看よ天は一切の物を愛養して、更に親疎貴賤の差別なく、地は山は山、谷は谷、陵は陵、澤は澤と、尊卑高下の秩序を正して、少しも紊亂せざることを。斯くの如く高下等を異にし、尊卑位を同うせざるも、一切の物を愛

育するに至りては、更に最負偏頗の差別なし。人も亦斯くの如く親疎あり貴賤あり、智愚あり賢不肖ありて、萬品齊しからずと雖も、皆吾が同胞、皆吾が一體なれば、孰れをか愛すべからざらむ。孰れをか大切にすべからざらむ。古の聖人と云ふも、賢人と云ふも、唯此の一心を仁と禮とに置きて、天神地祇と合體し給ひしものにて、天下の人物を愛敬し給ふに、最負偏頗の隔なきこと、全く天地と異なることなし。されば一切の人物を愛敬するは、直に是れ聖賢を愛敬するなり。一切の事物に隨順して逆らふことなく身を打任せて一切の人物の志を通すは、直に是れ聖賢の志を通すなり。如何にとなれば、聖賢の志は、もと斯の世界の人物をしておの／＼其の所を得さしめむと欲し給ふの外、他に餘念なければ

なり。されば斯の心を聖賢の愛に合し、斯の心を聖賢の敬に合して、一世の人を安むずるは、直に是れ聖賢の手傳ひをして、聖賢の思召を運ぶものなり。況や古の聖賢とても、一切の人物に因りて、慈悲心を起し、其の慈悲心に因りて聖賢となり、佛陀となられしものなれば、一切の人物は實に吾が徳を立て、福を植うるの福田なり。いかでか之を愛敬せざるべけんや。大學の明德を天下に明らかにすと云ふも、天下を離れては吾が明德を明らかにするの道場なし。此の意を篤と會得して、平生の一心を確乎と愛敬の上に置くべし。

凡人は、我他彼此の妄見が強烈である、強いて人の美を成す事を勤める

第三に成<sub>ス</sub>人之美<sub>ト</sub>とは、人の善き志あるを助け育てて、美きものに成り立たすことなり。夫れ美玉も、初めより美玉に非ず。其の

と自然と此の妄見をも解説する事が大なる推して知るべし。

石の中に韜<sub>つ</sub>れたる時は當り前の石なれば、其の儘に捨置<sub>か</sub>ば、石瓦も同様なり。然るを琢<sub>ぎ</sub>き上<sub>あ</sub>ぐれば、光を放ちて世の寶となる。人の内證<sub>ないしやう</sub>に善き志あるは、恰も琢<sub>か</sub>ざる玉の如し。助け導きて育て上げざれば、平々の凡人のみ。されば人の善き志、善き企あるを見れば、資を出だして賛成し、力を盡くして助成し、皆誘ひ掖<sub>たす</sub>けて之を成就せしむべし。其の之を誘ひ助くるの法は、或は之が爲に其の主義を奨<sub>す</sub>め、其の資財を借し、或は之が爲に其の成業を維持し、又或は他より讒言<sub>ざんげん</sub>せられて、迷惑することなど有らば、其の人に成り替りて辯護し、或は吾れも其の仲間へ入りて、誹謗<sub>ひぼう</sub>を相伴し、百方方便して唯其の善志善事を、立派に成立たしめむと心配すべし。大凡吾れと物好みを異にしたる人を、惡み嫌ふは

世間の人情なり。其の上世間に善人は少くして不善人は多し。されば偶々一人の善事を企つるものあるを見れば、多数の人がおの／＼其の反對に立ちて、妨げ毀るは澆漓の世の形勢なり。其れ故善人が、世に自立して善を爲すこと實に難し。されば世に善き志は抱きながら、一生爲遂ぐることに無くして空しく朽ち果つるもの勝なるは、實に口惜き事の限りなり。況や人に勝れて一器量あるものは瑣細の瑾に意を止めずして、行跡の異風なる事も多かれば其れ等の事を言ひ立てて多数の小人が拒み妨ぐるゆゑ、善事も常に敗れ易く、善人も常に謗を得てみずから完うすること能はざるは、古今の通歎なり。唯世に仁人として慈悲深き人、長者として心の大量なる人のみありて、豪傑を賛成し善人を助成するは勿論、假

令吾れと物好みを異にし、或は吾に敵たう人にてても、苟も善き志を抱きて善事を企つるものあれば、餘所に見捨てず、能く之を匡し直し輔け導きて、其の美を成就せしむ。斯かる仁人長者は、世上の謗をも顧みず、多数の嫉をも屑とせず。斷乎として唯善にこれ與みするが故に、一郷に在りては以て一郷の元氣を回復すべく一國に在りては以て一國の命脈を培養すべし。其の功德最も計り知るべからざるなり。

第四に勸人爲善とは、凡そ人と云ふ人の腹の底を捜し見れば、善心なき者はあらず。されど世渡りの業務に逐はれて、偶々善事を聞きても耳に入らず、耳に入りても心に染まず、心に染みても身に行はずして、空しく一生を過すもの多し。又初めより貧賤な

我が正法の見地作か  
すれれば自ら見  
すと他人の作すしめ  
ると其の功徳同一  
てある。

るものは、常に貧苦に馴れて却て悪心を起さざれども、中途より困窮に陥りしものは、其の困苦に堪へかねて、我れに備はらぬ横財を貪り、或は富貴の人を猜み妬みて無法の訴を起し、或は正直の人を侮り巧みて姦曲謀計に誘ひ入れ、終に天道に見放たれ、郷里に見棄てられて、惡道に沈淪するものあり。斯かる類を見聞しては、事に觸れ縁に應じて百方方便し、其の迷ひを開き、惑ひを解きて漸々善道に導き入るること、譬へば水に溺れたる人を拯ひ上ぐるが如く、夢に魘はれたる人を呼び覺すが如くすべし。假令辛き世渡りする者にても、一旦善心の方に楫を取り直す時は、心身忽ち安らかになりて、怨み嫉みの心も消え、日夜の貧苦もさのみ苦にならずして、結句はいつとなく運命を取り直し、思ひの外

なる繁昌を來すものなり。然るを愚痴頑陋の人は、此の捷徑を會得せず、却て迂遠きことと思ひて、一生善道に踵を廻らさざるこそ悲しけれ。韓退之曰く。「一時勸人以口。百世勸人以書」と。是れは百千年の後までも、人を善に勸むることは書物を著はして遺すに在り、其の時人を善に勸むるは、口を以て説き諭すに在り、と云ふ意なり。誠に斯の意の如く時と場合とに因りて、或は口を以ても説き、或は書を以ても誨へて必ず偏々廢すべからず。凡そ人には種々の氣質あるものなれば、其の人々の氣質に應じて、或は面白くも書き並べ、或は可笑くも説き立てて惡を去りて善に赴かしめむこと、猶醫師が病症に對して藥を盛るが如くなるべし。さて又我が心の切なる儘に、數々諫めて他に疏しまれ、或は他の心

悪しき故に、却て我れに迷惑を及ぼす等の事ありとも、直に我が身に引反へして、是れ我が知慧の至らぬ處、是れ我が徳義の足らぬ處とみづから省み勉むべし。努々怒り恚むべからず。假初にも怒り恚む心起らば、却りて教へたる人よりも、一段劣れる所作なりと、深く省み戒むべし。

第五に救入危急とは、人の難義を救ふことなり。或は豫々油断せし事が一時に發して、身に被り來れる難義、或は不圖したる不調法にて人に責め噴まるる難義、或は身に咎もなきに無理非道を持ち懸けられ、己が器量に捌きかねて持ち儼みたる難義、或は一時の了簡違ひにて、法律を犯したる等の難義は、世に時々有る事なり。斯かる人の落目を見ては障らぬ神に崇なしとて、寄付かぬ

物質的ばかりでなく、精神的に危ない、徳を救ふは一段と功徳を大なるべし、正しき精神生活と、與へるの必要を

が世の習ひなる故に、愈々苦痛に逼迫するもの多し。偶々個様の者に遇へば、之を我が身の上感じて大概に謀り定め、是れ式の事何程の咎かあらむ。などと言ひ慰めて、先其の人の心の苦みを開き救ひ、其の上にて種々と工夫を運らし、或は言葉を以て彼が無失の罪を伸べ、或は方便を以て、彼が難義の機を外し遣はすべし。崔子曰く、「惠不在大。赴人之急可也」と。是れは人に恵みを施すは、強ち大いなる事業に在らず、唯世の急難あるごとに駆け付けて救はば、其れにて宜し、と云ふ意なり。此れは誠に仁者の一言なり。

熟々世間を觀渡すに、善人と云ふにもあらねども、天性の世話好きにて、人の急難を苦にして救ふこと、我が身の痛みを去るが

如く、又は俠氣にて據るべなき人を匿まひ、或は刑律に處せらるべきものを無事に治めて安心させるなど、存外大いなる善根を爲しつつ、其の身はさのみ善事とも知らぬものあり。斯かる人、後には多く不意の財を得、或は富有に取り立てられ、或は發明なる賢兒を持ち、或は無病長壽にして、安樂に終りを遂ぐるものなり。凡そ世に善人と稱する程の人ならぬに、生涯を幸福に送る人あるは、人の怪み疑ふ所なるが是は必ず陰徳の陽報にて、茲に稱する人の類なるべし。但し人を救ふには、身の苦みよりも心の苦みを救ふこと、實に人の知らぬ大善なれば、須く進み勉めて勵み行ふべし。若し之に反して假令意趣遺恨ある人たりとも、其れに心を苦ましめて、あな心地よやと、思ひ忍べるものなどは、必ず倍々の

たとへ一小作善でも、其目指すためと云ふ一念心から出た事は皆大利善大福恵となる。

悪報を受くべし。須く懼れ戒めて速に改むべき事にこそ。

第六に興建大利とは、小にしては一村一郷の内、大にしては一縣一國の中に於て、人々の利益に成る程の事を興し建つることなり。例へば水吐悪しき處には、渠を鑿りて通じ、用水の乏しき處には、川を疏けて導き、水害の虞ある處には隄を築いて防ぎ、道路の悪き處は修理を加へて善くし、渡の便なき處は、橋梁を架けて渡し、或は貧人には飯を與へ、旅人には宿を借し、暑氣の節には水を出だし茶を施し、岐の多き路には標の杭を立てて、旅客に便にするなどを云ふなり。箇様の事は己れ一人の力に及ばねば、多人と力を合せて仕遂ぐべし。若し世間より指し出たる人なり、世話好きの男なりなどと誹られ罵らるるとも、少しも避けず我が

身の勞を忘れ、誹る人の怨を忘れて、一向に天道の御手傳を勤むべし。

第七に捨財作福とは、佛法の萬行の中に布施の行を第一とす。

布施とは只捨の一義なり。故に財を捨つると云ひて財を施すと云はず、捨つるとは潤を以て人に譽められむとか、禮を云はれむとか報 佛法の達人は眼耳鼻舌身意の六根をも、捨てて我身とはせぬなり。色聲香味觸法の六塵をも捨てて我が物とはせぬなり。一切の境遇、萬行の功德をも捨てて我が境遇、我が功德とは思はぬなり。されど其れは至極六かしき事なれば、先財より捨てて施すなり。其の故は人間は衣と食とを以て命を續ぐものなるが、其の衣食は財を以て求め得るものにて、世間には財より大切なるもの無ければなり。其の大切なる財を捨て

人我を捨てるのが  
第一の布施  
耳に入らざれば  
耳に入らざれば  
の書を読むれば  
を得る事難し  
知

徹底的の宇宙正法  
其他の神佛の及  
一切の倫理思想  
哲學の徹底的の  
思想は皆不徹底  
あるから正法が  
つるから正法が  
れつるから正法が

て施すときは、内には我が慳貪の罪を亡ぼし、外には他の貧苦の急を救ひて、自他ともに大いなる功德となるなり。此の功德何れにか歸すべき。廻り／＼て必ず其の人に歸するが故に、作福とは云ふぞかし。但し此の事初めは中／＼行ひ難し。されど勉強して進み行けば、後には氣泰かに心安らかなりて、其の快きこと言ふばかり無し。されば此の事を以て勉めて汚濁の情を洗ひ去り貪欲の念を除き盡くすべし。

第八に護持正法とは、儒佛の道を束ねて正法と云ふ。正法は、世界に取りては日月なり。人間に取りては眼目なり。正法あればこそ、天地の手傳も作さるれ、萬物の世話も爲らるれ、心を汚さむ塵を拂ひ去てて國家をも治めらるれ、心を縛れる繩を解き棄て





必ずしも然らず仁  
は天に凶は壽なる  
が如き實例は三  
違なき是れは三  
時業の理より見  
ば分明するれば  
榮るに忠孝なれ  
長久疑ひなし

事ふるときは、表裏なきを第一とす。例令一事を行ふにも、君知り給はずと云ひて、儘にすると勿れ。例令一人を罰するにも、君見給はずと云ひて私すると勿れ。古人の言に君に事ふると、天の如くせよと云へるは、實に千古の格言なり。天と思はばいかでか表裏の爲らるべき。是等の處、最も陰徳に關係あり。試みに忠孝の家を看よ、子孫長久して家門繁榮せざるはなし。之を看て須く切に慎み勉むべし。

第十に愛惜物命とは、殺生を戒むることなり。凡そ人の人たる所以は、唯此の物を憐み惻はるの慈悲心あればなり。此の慈悲心は、即ち天地神佛の御心にて、また一切萬物の本心なり。聖人が仁を求めよと宣ふは、唯此の心を求むるなり。君子が徳を積むと

云ふも唯、此の心を積むなり。佛氏が殺生を戒め給ふも、唯此の心を育つるなり。されば生を殺し命を奪ふは、己が本心を殺して併せて天地神佛の御心を殺し奉るものなり。豈恐れ戒めざるべけむや。支那には牛羊豕などを犠牲にして、天地神明を祭るの古禮ありしが、聖人は其の正月の祭には、牝を犠牲に用ふることを禁じ給へり。是れは春になれば、牝は子を生むが故に其れを憐み惻はりてなり。又孟子は庖厨を遠ざくと言はれたり。是れは牛羊鶏豚などが殺さるる時に、苦み叫ぶ聲を聞きては、其の肉が喉に下りかぬる故に、君子は庖厨を遠方に建つると云ふことなり。是等は皆此の慈悲心を傷ふまじとの心配なり。されば前輩には、四不食の戒といふを守りし人あり。一には殺したる有様を聞ては、其

の肉を食はず。二には殺したる有様を見ては、其の肉を食はず。三には家に畜たるものは食はず。四には我を饗さむ爲にわざ／＼殺したるものは食はずとなり。人々若し思ひ切りて肉を断つこと能はざれば、先づ是等の戒より守り初めて漸々と進み入り、次には四足を断ち、次には二足を断ち、次には鯉鮒鱒鰻蛤卵などの生ながら殺して食ふものを断ち、次には無鹽物を断つやうにせよ。慈悲心が増長するに随ひて、一向に断ちても苦にならぬやうになりぬべし。唯此れのみならず、螻蛄蚊虻蚤虱の類に至るまで、皆天心中の靈物にて、此に謂はゆる物命なり。決して妄に残害すべからず。氣の附く限りは助け活かして遣はすべし。殺生を戒むると放生を勸むるとは、恰も裏と表となり。昔し蟻の水に溺るるを救

ひて高第に登り、鹿の子の死するを助けて、宰相の官に升り、雀を救ひて三公となり、龜を放ちて諸侯となりし例あり。是等は皆何事に就いても其の如くに慈悲心を実行する故に、天地神佛の御心に叶ひて、立身出世せしものぞかし。之を要するに殺伐殘忍の心を以て、物を殺すは固より例令殺さずとも、其の物の苦み惱むを見て、心地よく思ふが如きは實に大の殺生にて、即ち己が本心を殺し、併せて天地神佛の心を殺し奉るものなり。之に反して或は國家の爲に、軍に立ちて敵を殺し、或は君民の爲に涙を吞みて賊を誅するが如きは己が本心を実行し、併せて天地神佛の心を執行するものなれば、多く殺し悉く誅するほど物命を愛惜するものぞ。善行は窮りなし。悉く述べ盡くすべからず。先此の十條を実踐躬

行して、而して之を推し廣めなば、則ち萬德備さに具はるに至るべし。

### 改 過

譯者曰く。前の爲善十條は、行事の上にて於て誨を説く。此の改過三條は、更に歩を進めて、心術の上に就て教を立つ。學者宜く之を心に當てて讀むべし。

春秋時代の賢大夫たち、人の言語動作を見て、其の人將來の吉凶禍福を説くに、一も中らざること無し。其の事實は左傳、國語

前の積善は積徳的  
の善行にして此徳的  
の善行にして此徳的  
で過あるが共に形

式の上からも精神  
が大切である事を  
知らねばならん。

等に明らかなり。凡そ人の吉凶禍福は、先心中に萌して而して面部手足に顯はれ、其れよりして一身に及び来るものなり。凡夫の行は都て過不及多きものなれども、其の深切に過ぎて過つものは常に福を得、薄情に過ぎて過つものは常に禍に近づくを觀る。俗眼にては此の状態が見えぬゆゑ、或は劍難に遇ひ、或は天災に遇ひ、或は火難水難に遇ふなども豫て定まること無く、其の時偶然に出會するやうに思へども、凡そ善にても惡にても、其の偽りなき所は悉く天に通じて居るもの故、賢人の眼にては、福の將に至らむとすることをも、其の言語動作の善なるを觀て、必ず前以て之を知り禍の將に至らむとすることをも、其の言語動作の惡なるを觀て、必ず前以て之を知るなり。昔し春秋の代は、聖人の在世

に、まだ遠からぬ時なれば、賢人たちの明眼にて見定めたる事の  
多くの中せしは誠に道理あることなり。今銘々の心を見るに、善  
に動くこと少なくして、悪に動くことのみ多かれれば、定めて面部  
手足に顯はれたる悪ありて、凶事災難の一身に及び來むとしたる  
も有らむを、知らざれば是非も無し。唯福を獲て禍に遠ざからむと  
欲せば善を行ふより前に、先づ吾が心の過を改むべし。其の過  
を改むるに付きて三つの用心あり。

譯者曰く。上文に、春秋賢大夫の未然に將來の吉凶禍福を看破  
したる事を語る。是れは左傳國語を讀みし人は、能く知る所な  
れども、今其れ等の書を讀まぬ人の爲、畧して其の有増を引き  
示さむ。

魯の桓公が宋の亂を平らげし時、宋の國より賂として郟の大  
鼎を贈れり。桓公大に喜びて、之を大廟に置かむとす。其の時  
藏孫達諫めて曰く、人の君たる者は徳を明かにし、違法の事を  
塞ぎて、子孫に示し、百官に照臨してすら、猶之を失はむことを  
懼る。然るに今徳を滅し、違法の事を立て、賂の器を大廟に置  
て、以て明かに百官に示さば、百官の之に習はむ時、いかがし  
て責むべきぞと。周の内史之を聞て、藏孫達が子孫は魯に於て  
長く繁榮せむと云ひしが、果して後大に繁榮したりき。

楚の屈瑕が、羅を伐むとて出陣せし時、鬬伯比之を見送りて  
還りて其の御者に向ひて、屈瑕は必ず敗北して死せむ。足を擧  
ること高し。心固からずと云ひしが、屈瑕果して此の軍に敗北

して荒谷と云ふ處にて縊て死にき。

宋に大水ありし時、魯の莊公使を使はして、水災を弔はしめたり。是の時宋の君、魯の使者に對へて曰く、孤實に不敬なるが故に、天之に災を降され、君にまで心配を及ぼして、懇命を拜すること面目なしと、魯の臧文仲、此の答を聞て曰く、宋は其れ興らむ乎。列國凶事ある時に、謙りて孤と稱するは禮なり。口上に懼れを帯びて名稱に禮ありと。其の後此の口上は、公子御説の辭なりしと聞て、然らば御説は宋の君と爲るべしと云ひしに、果して其の言の如くなりき。

周の五大夫、子頹を王に立むとて王を伐ちしに、負けて子頹は衛に出奔せり。其の年衛の師、燕の師と周を伐ちて、遂に子

頹を立てたり。翌年子頹、五大夫を饗應して、六代の樂を舞はせぬ。鄭伯之を聞て曰く、哀むべき時に樂み、樂むべき時に哀めば殃必ず至るとぞ。今子頹は、王の位を犯す。禍之より大なるは無し。歌舞して倦まず、是れ禍を樂むなり。憂必ず及ばむと云ひしが、翌年果して殺されにき。

魯の定公の時、邾子魯に來朝す。邾子は玉を執ること高くして、其の容仰ぎたり。定公は玉を受くること卑くして、其の容俯きたり。子貢之を觀て曰く、此の二君は皆死亡あらむ、相會するの體皆度に叶はず、心は已に亡びたり。今其れ高く仰ぐは驕れるなり、卑く俯くは替ふるなり。驕るは亂に近く替ふるは疾に近し。而して邾子は客にして、定公は主なれば、公先づ亡

び給ふべしと云ひしが、其の年の五月定公果して薨じたり。其の後七年に邾子は魯の哀公に擒にせられき。

鄭伯、趙孟を垂隴と云ふ處にて饗應せし時、鄭の子展、伯有、子西、子産、子大、叔印段、公孫段の七子、思ひくゝに詩經の詩を歌ひたり。趙孟之を聞て一々に其の人の休咎を論定せしに果して一つも失ふ所なかりき。

楚の遠罷、晉に往きて蒞みて盟ひし時、晋侯之を饗應しければ、既醉の詩を歌ひて晋侯を美めたり。叔向之を聞て曰く、遠氏の子孫は必ず楚國にて繁昌せむ。君の命を承けて、敏きことを忘れず。遠罷は將に楚の政事を知らむ乎。敏くして君に事へば、必ず能く民を養はむ。然らば則ち政事は其れ焉にか往かむ

と云ひしが、後果して其の言の如くなりき。

周の定王、劉康公をして魯に聘せしめし時、進物を太夫に送られたり。劉康公其の家に至れば、季文子、孟獻子の兩家は、儉約にして、叔孫宣子、東門子家の兩家は奢侈なりき。既に歸れば定王問ひ給ふ。魯の大夫孰れか賢なると。劉康公對て曰く、季氏孟氏の二氏は、長く魯に榮ゆべし。叔孫東門の二氏は、其れ亡む乎。家若し亡びずば、身必ず免れざらむ。夫れ儉なれば則ち用足る、用足れば則ち一族を保庇すべし。侈れば則ち匿きものを恤へず、匿きものを恤へざれば憂ひ必ず身に及ばむ。人臣として侈るは、必ず滅亡の道なりと云ひしが、後八年にして東門子家は齊に出奔し、又其の後十六年にして、叔孫宣伯も亦

齊に出奔したりき。

河陵の會に、單襄公、晋の厲公に見えしに、厲公視ると遠くして歩むと高かりき。晋の卻錡見えしに、其の語犯したりき。卻犇見えしに、其の語迂なりき。卻至見えしに、其の語伐りたりき。齊の國佐見えしに、其の語盡くしたりき。單子之れを見て曰く、晋は將に亂あるべし。其の君と三郤と之に當らむ乎。吾れ晋君の容を見て、三郤の語を聞くに、殆必ず禍あらむ。齊の國佐も亦之に與らむ乎。淫亂の國に立ちて、言を盡くすを好み、以て人の過を擧ぐるは、怨の本なり。唯善人のみ能く盡くせる言を受くるが故に、齊は其れ有らむ乎と云ひしが、後簡王の十二年に、晋果して三郤を殺し、其の翌年に晋侯もまた殺

さる、齊人も亦遂に國佐を殺したりき。

以上は其の概畧なり。詳細は兩書に就きて諒知すべし。

第一に要發耻心。耻心を發するとは、吾が身の淺ましきことを思ひて、深く耻づる心を起すとす。古の聖人賢人と云ふも、眼の横に切れ、鼻の竪に付きて、手足の二本づつある五尺の人なり。吾れも亦眼の横に切れ、鼻の竪に付きて、手足の二本づつある五尺の人なり。然るに彼れは何が故に、聖賢君子と呼ばれて、萬代の師と仰がれたる。吾れは何が故に、割れ瓦の如く、心は塵情に染まり、身は不義を行ひ、人は知らずと思ひて愧る心もなく、平生の所作を省れば人に對して話さるるとなく、日々に禽獸の仲間に入りて、一生を過さむとする世の卑むべく愧づべきと、之より大



なるは無し。孟子曰く、「耻之於人大矣。以其得之則聖賢。失之則禽獸耳」と。此の意は、恥と云ふものの、人の一身上に關係すると、實に莫大なり。如何にとなれば、此の恥を知りて身に占むれば、聖賢ともなられ、此の恥を忘れて身を去らしめば、禽獸ともならざるが故なりとなり。此の一言は實に過を改むるの善道に足を運ぶの首途なり。

第二に要發畏心。畏心を發するとは、底氣味わるく空恐ろしき心を起すことなり。能く考へて看よ、吾が頭の上は天にして、凡眼には見えねども、天神之に坐ませり。吾が足の下は地にして、凡眼には見えねども、地祇之に坐ませり。吾れ其の間に在りて、天神地祇と共に行住坐臥す。吾れ道理に闇くして、誰れも知るも

常に天神地祇の照  
常あるや毛頭のみ  
覺地はな三寶の意  
俗ならざる難し給  
なす其とも時に給  
照外魔も常に何  
魔外魔も常に何  
恐長すべし

の無しと思へども、天地は常に之を看そなはし、鬼神は恒に之を鑒み給ひて、重き悪事には種々の殃を降し、輕き悪事には現在の福分を減らして、一々分明に之を咎め給ふ。之をいかにぞ、懼ぢ恐れざるべけむや。唯是れのみ非ざるなり。或は一家の内に籠り、或は一室の内に潜みて、種々の善からぬ事を巧み出だし、人にも語られぬ事を思ひ付きて、みづから夫々の言ひ譯を拵へ、表面の觀を作り飾りて、是れにて藏し課せたりと思へども、何ぞ圖らむ吾が心は、天神地祇の御心と聯續して居るが故に、決して欺かれざるのみならず、天地鬼神は、五臟六腑の中までも悉く看透し給へば、一念の動くをも、一情の萌すをも、一切知召すと云ふこと無し。輒て人にも看破せられて、折角の心配苦勞も亦半文

錢の値だになし。之をいかにぞ、凜々と身に震ひ、心に慄かざるべけむや。

又唯是れのみ非ざるなり。此の息が通ふ程ならば、猶悔い改めらるべきを、出でし息一たび入らざれば、則ち如何にかすべき。古人には一生惡事を作したるが、死期に臨みて大いに一生の惡事を悔い、忽ち一の善心を發して、遂に終りを善くせしものあり。是れは猛く烈しき一念なれば、夫れにて能く一生の惡事を濼ひ落すほどの力あるなり。之を千年も日の當らぬ暗窟の中に、一點の燈を照らすときは、千年の闇も忽ち除いて、復た些の痕跡なきに譬ふ。されば過は舊き新きを論ぜず、改るが何より以て肝要なり。此の世の中の無常を看よ。此の人の身の果敢なきを看よ。出だし

し息が再たび入らざれば、此の身は其れ限りにて、悔い改めむと欲するも、詮なきものぞ。果して然らば、此の世にては千百年の間惡名を留めて、いかなる孝行の子、慈悲の孫出づるとも、之を濼ひ落すこと能はざるなり。先の世にては、惡道に墮ち沈みて、生々世々の間、其の責苦に堪へがたし。之をいかにぞ、底氣味の惡からざるべき。空恐ろしからざるべき。是の故に須く畏心を發して速に過を悔い改むべし。

第三に要發勇心。勇心を發するとは、勇ましく男らしき心を起すことなり。凡そ人の過を改むるに吝なるは、臆病神に取り附かれて、有爲果斷の氣象なきが故なり。されば奮然と勇を鼓し、勃如と膽力を振ひて、従前に造りし惡事は昨日既に死ぬるが如く、

從後に作さむ善事は、今日始めて生るるが如く、少しも用捨せず、斷乎と改め除くこと、譬へば毒蛇に噛まれし者の、猶豫すれば其の毒忽ち全身に漫ごりて、終に命を失ふが故に、矢庭に其の指を斬り棄てて、少しも遲疑せざるが如くすべし。是れ即ち易の風雷益の教へなり。是くの如く發憤興起するを、勇心を發すると云ふなり。

さて個様に恥心 一 第 二 畏心 二 第 三 勇心 三 第 三 心を具足して、此は吾が過なりと氣が附けば即ち戒め、心に知れば即ち改めさへすれば、假令千萬無量の咎ありとも、恰も春の氷の日に遇ふが如く、悉く消え失せて痕無かるべし。されど人の過は、事の上より改むるものと、理の上より改むるものと、心の上より改むるものとありて

工夫おのゝく同じからざれば、其の効驗も亦異れり。因に之を示さむ。

事實上の改悔

其の事の上より改むるとは、前日まで殺生したるものが、今は戒めて殺さず、昨日まで立腹せしものが、今は改めて怒らざるが如く、其の事柄に就て改むるを云ふなり。さて斯くの如く、事柄に就て改むるは、外より心を制するものなれば、其の病根をば斷ち難し。如何にとなれば、其の病根は猶心に在りて存するが故に、右に改めたりと思へば左に起り、前に戒めたりと思へば後に存して、畢竟解脱の道には非ざるぞかし。故によく過を改むる者は其の事を禁ずるよりも、先づ其の理を明らかにして、理の上より改むるを詮とす。

其の理の上より改むるとは、例へば殺生の如き其の理に就て思ふべし。天地は生を好みて殺を惡み給ふ。然るに好みて殺生するは、天地の心に背くものなり。又一切の生類は、いかに至微の小蟲と雖も、命を惜むの情は、更に我れと異なることなし。然るに彼れを殺して我れを養ふは、誠に虎狼の心なり。且彼れの殺さるるや、刀を以て割き屠られ鑊に入れて焚き烹られ、慘酷の苦痛を與へて、冤を含み恨を結ばしむ。さて其の所詮を考ふれば、唯自が口腹を養はむとの仕事なり。熟々惟みれば、假令いかなる美味精肉にても、畢竟喉を過ぐるまでの樂みにて、既に喉を過ぎ畢れば、蔬食菜羹と何ぞ異らむ。かかる喉五寸の樂に、彼れが大切の性命を奪ひて、我が貴重の福分を損せむことは、實に馬鹿の極み

なり。且血氣あるものは、必ず靈性あり。其の靈性は皆我れと一體一物なり。假令我れ不徳にして、佛菩薩の如く、彼れをして我れに馴れ親ましむること能はずとも、無慘に彼れを傷ひ殺して、終に生々の仇を構へしめ、世々の怨を結ばしむることは、實に愚痴の至りなりと。夫れ人一たび觀念して此に及びなば、流石の美味精肉も、輒く咽に下らざることあらむ。

次に立腹の如きも、其の理に就て思ふべし。人に不行届のあるは、智慧足らざる所以なれば、情に於いて感むべき事なり。されば彼れ無理なる事を、我れに仕向くるとも、却て不便にこそあれ、何の怒ることかあらむと。又思ふべし。天下にみづから是とするの豪傑なく、亦人を尤むるの學問なし。如何にとならば、常人は

心狭く、量偏屈なるが故に、吾が量見は非なりと知りても、改めて人に従ふこと能はず、況てみづからは是なりと思ひ定むることは固く執じて怒り争ふものなれども、豪傑とて千萬人に勝れたる人は、胸中の寛大なること、大海の如く事と時との宜しきに随ひて自由自在に滞る所なき故、みづからは是として氣張ることは、少しも無きものなり。亦學問なき人は己れを差置いて、人を引當にする故に、其の引當ての外るときは、妄に人を恨み怒ると雖も、苟も學問したる人は、譬へば弓射るが如く外れたるは的の咎に非ずして、己が手前の悪き故なりと、みづから手許を省み改むるものなり。されば人の我れに不都合なるは、即ち我が徳の未だ修らずして、感化の彼に及ばざるなれば、罵詈譏の來るは皆吾が徳を

修め、行を改めしむるの教訓なりと、却て喜びて其の教訓を受くべし。又假令人ありて罵詈譏を、猛火の如く焚き付け來るも、我れ之を聞き流しにして少しも心に掛けざるときは、猶火もて虚空を焼くが如く、幾度焼きても焼く物なき故、終にはおのづから熄むものなり。若し之に反して謗りを聞て怒り、或は辯ずるときは、怒れば怒るほど、辯ずれば辯ずるほど、我が徳の累ひをなすこと、譬へば蠶の繭を作るに随ひて、みづから身動きの成らずなり行くが如し。されば怒は唯に益なきのみならず、實に害あること斯くの如し。其餘種々の過事惡事も一々道理に照らして、之を思案すべし。其の理明らかになりぬれば、其の過はおのづから止みなむ。之を理の上より改むるの工夫となす。

其の心の上より改むるとは、凡そ過千萬無量なりと雖も、唯是れ一心の造る所なり。吾が心だに動かずは、過いづくよりか生ぜむ。されば學者は色を好み、名を好み、利を好み、怒を好むなどの種々の過に於いて、必ずしも一々之を逐ひ廻らず、但まさに一心に善を爲すべし。一心に善事〜と志すの正念さへ相續して間斷なければ、邪念は自然に消滅すること、猶太陽が天に當れば、妖怪はおのづから潜伏するが如し。是れぞ古の聖人が、惟れ精惟一。允に其の中を執れよと仰せられし眞傳の處なりける。夫れ過は心に由りて造るが故に、心に由りて改むべきこと。猶地に由りて仆れしものが、亦地に由りて起きるが如し。且一切の過を改めむに、先づ一心を治むることは、恰も毒樹を斬るに直に其の根

を断てば、必ずしも枝々を伐り、葉々を摘むに及ばざるが如し。されば大抵最上根の人は、其の枝葉を逐はずして直に一心を治むるなり。一心だに清淨ならば、邪念が動けば即ち氣が付き、氣が附けば即ち無し。之を心の上より改むるの工夫となす。但し此の工夫に堪へざる人は、須く事物の道理を明らかにして、即ち理の上より改め除くべし。但し其れにも猶堪へかぬる人は、須く一々の事柄を禁じて、即ち事の上より改め去るを要す。夫れ上根の士にして、下根の人の工夫より手を下さむは、させる失策なけれど、下根の修行のみに執着して、上根の工夫に味ければ、解脱の道に於て拙かるべし。

之を要するに、過を改め罪を滅するの道、易き業に非ざれば、

佛陀の加護と誘導  
とを得べし、更に  
聖教の拜覺、聖經に  
の讀誦を兼ね、聖經に  
に只管打坐の力と  
に依るべし。

恐らくは自力のみにて堪へ難からむ。されば近くは良師良友に隨ひて、其の誘導助力を仰ぎ、遠くは神明佛陀に誓ひて、其の證明加護を願ひ、一心に懺悔して晝夜懈らざれば、或は一七日、又は二三七日を経、或は一月、又は二三箇月に至らば、必ず其の効驗ありて、或は心もちの何となく安く廣らかなるを覺え、或は智慧が頓に開けて、世界の道理、若しくは書籍の義理など、忽ち開通するを覺え、或は世事繁雜の中に處りて思案を用ひざるに、念ふ所皆理に叶ひ、或は豫て意趣意恨ある者に遇ふに、從來の怒が忽ち替りて喜びとなり、或は黒き物を吐き出だす夢を見、或は神聖に率ゐ連れらるる夢を見、或は虚空を飛行する夢を見、或は幢天蓋などの、神佛莊嚴の具を夢見る等の種々殊勝の事あり。

是等は皆罪障過惡の消滅せし効驗なり。但し斯かる効驗を得たりとも、決して自滿高慢の意を起すべからず。彌々心を慎み、身を謙りて進むべし。神妙の理は實に窮りなきものなれば、過を改め善に進むに、豈盡くる時あるべけんや。昔し蘧伯玉と云ふ人は、孔子にも譽められし賢人なるが、二十歳の時既に十九歳の過を知りて盡く之を改めたり。然るに二十一歳に至りては、去年の改め盡くしたりと思ひしは、猶未だ盡きざりしとして又之を改め、二十歳に至りて、又二十一歳中の事を回り視れば、猶夢中に在るが如しとして又其の非を改め、斯くの如く年々歳々に改めつ、五十歳に至りて、猶四十九年の非を知りたりと云ふ事あり。古人が過を改むるに、心を碎きしこと斯くの如し。況て吾等凡流の者は、過

悪日々あくひびに積つもるべけれども、今日までの行事にさしたる過あやまちあるやうにも見えざるは、心が粗あらくして眼が翳くもれる故なるぞかし。豈あな淺ましましきことならずや。其れ人の過くわ惡あく深しん重じゆうなる者にも、亦其の徵しるしあり。或は心が昏くらく塞ふさがりて、只今の事も、其の場を離はなるれば即ち忘わすれ或は事もなきに斷たえず心を惱なう亂らんし、或は正ただしき人に遇あへばそら恥はづかしく、嫌きらはしく思おもひ、或は正ただしき講こう話わなどを聞きては面おも白しろからず、或は人に惠めぐみを施ほして、却かえて其の人を怨うらみ、或は夢に魘おそはれ咬くされて本心を取り失うしふなどは、是れ皆惡あくを積つみ、罪つみを累かさねたるの驗しるしなり。若し一にても是等の事あらば、直ただに奮ふん發はつして痛いたく過あやまちを改あらめ善よに遷うつるべし。努ゆ々く此の大事を誤あやままることなかれ。

決科要語

楊貞復先生撰

譯者曰く。此の書中記する所の人名、及び干支等に據りて考ふれば、此の撰者楊貞復は、袁了凡えんれうはん同時代の人なり。されば此の決科要語は、陰險錄いんしつろくの著あるを幸さいひして、貞復先生ていふくせんせいが其の奥に書き加へられしもの乎。又は此の撰あるを幸として、了凡先生れうはんせんせいが請ひ受けて茲こゝに追加せられしもの乎。楊貞復先生やうていふくせんせい撰せんみあれば、或は後の方其の眞しんに近からむ。其は兎もあれ、原本既に茲こゝに收せまめたれば亦茲こゝに譯出す。

休寧きゆうねいと云ふ處に、程學聖ていがくせいと云ふ儒者ありけり。其の師洪甲先生しこうかせんせいの教を受けて、頗る道理あきらに明かに品行方正ひんかうほうせいにして、少しも媚こび諂へんの

前來二三の神祕的的  
の如き一決科要語  
の如き現代科學的  
の如き元論的知識  
の如き二元論的知識  
の如き二元論的知識  
の如き二元論的知識  
の如き二元論的知識





も優れ、年も四十を超えぬれども、いかなる事にか未だ及第せざりければ、或時洪甲、學聖に問ひけらく、汝能く是の仔細を知るや否やと。學聖對へけらく、此は吾が職分に非ざれば知らず、されど事に托して、稽へ知るべき由無きにも非ず。と云ひけるが、二日後に來て洪甲に告げて曰く、雪松公は、癸未の年萬曆十一年の榜に其の姓名見えたり。石林公は未だ見えずと云ひけるが、果して雪松は癸未の年に及第してけり。

洪甲又學聖に頼みて、石林が及第の時節を稽へしめければ、學聖對て曰く、大凡春の榜は幽冥にては、前年の十月に定まり、秋の榜は、幽冥にては其の年の正月に定まるなり。されば榜の定まるを待ちて、知らせ申すべしと云ふ故、洪甲も先其の意に任せ置

きぬ。斯くて其れより二年を経て、乙酉の年萬曆十三年の十月に至りて、學聖報じて曰く、此の頃二つの榜を見たり。上なるは丙戌の年萬曆十四年の榜にて是れには石林公の姓名なし。下なるは巳丑の年萬曆十七年の榜にて、是れに石林公の姓名あり。されど此の二つの榜の姓名、或は上が下となり、下が上となり、或は新たに加へられ、新たに除かれて、公に掲げらるる曉ならては、決定せずと云ふ。洪甲疑ひて其の故を問ひければ、學聖對へて曰く、幽冥にて、人間の善惡を沙汰することの微細なること、許邵が月旦評の如き疎漏なるものに非ず。平生に善を爲す人にては、忽ち一念の惡心を起せば、神は直に其の穢を惡みて之を引き除け給ひ、又平生不善を爲す人にては、其れに氣付きて猛く省み痛く改むれば、神は直

に其の馨きを喜びて之を引き挙げ給ふこと、影の形に随ひ響の聲に應ずるが如し。且及第の一事は、専ら天上にて文章を司れる文昌星の府に屬するが故に、文人學士の事は悉く此の府の帳簿に載せられたり。さて其の有様は唯本人が心行の微善微惡のみに止まらず、其の父祖父より、曾祖父高祖父の少善少惡に至るまで、悉く載せて漏らすこと無し。されば本人の陰徳陰慝、一言一行を遺さず計算するが上に、父祖の積善積惡まで、餘さず差引勘定すること、實に一分一厘の謬り無し。されば本人は餘り善からずして及第するは、其の父祖の積徳の餘りあるが故なり。本人は善人なるに及第せざるは、其の父祖の積徳の足らざるが故なり。又本人は放蕩にして檢束なけれども、其の心中に固く剛直を守り、腹に

毒氣なき者は、却て取り挙げらるるなり。又本人は能く世法に循ひて、見かけは善人の様に見ゆれども、心中不正直の處ある者は多く打ち棄てらるるなり。又榜に上りながら、忽ち名を除かるるは、心中新たに惡念を生じしなり。榜に上らざる者が、忽ち加へらるるは心中新たに善念に遷りしなり。幽冥の處分は斯くの如く其の人の心念如何によりて、忽ち吉となり凶となりて、曾て暫時も居据ること無し。今二つの榜共に増減未定の間在れば、吾れ能く石林公が、及第の運命あることを知りつれども、未だ戌の年に在る乎、丑の年に在る乎を知るべからずとぞ對へける。石林も正しき人なりければ、神に退けられざりけむ。其の榜に見えたりし巳丑の年に、果して及第を遂げにけり。雪松は予と同時に出世

せり。時の判者は馮開之にてありし。譯者曰く。茲に予と云ふは、此の篇の撰者楊貞復みづから云ふなり。又判者とは及第の人を試験して、甲乙を定むる。又此の年の石林の判者は、即ち予にてありしなり。

予或日石林が許を訪ひけるに、備に右の物語を承りて、大いに心に警むる事こそあれ。其は予幼少の時、父に従ひて及第の業を受く。常に講釋聽聞の夕は、夜通しに研究して、若し文字章句の間に發明する事などあれば、其の度ごとに父に申して喜ばせ參らせけり。唯悲しき事は母多病にておはしければ、毎夜人の寐靜まるを待ちて密に大路へ出て、天を拜して祈誓して曰く、吾れ小子何とぞ早く及第して、吾が兩親に安心せしむるやう、助け導かせ給へとぞ禱りける。されば是の時の一念は、唯父母を愛するの情

のみにて更に他念を雜へざりき。さればにや二十一歳の時、已に郷學にて撰舉せられたり。其の後都に赴きて度々の試験場に出てけれども、毎も落第して常に志を得ざりき。是の時奮然として思へらく、是は吾が心念の天理に差ひし爲ならむと。乃ち佛前に向ひて朝夕默禱して曰く、若し吾が心富貴にのみ志して、道德に志さず、吾が家の爲のみにして、生民の爲にせず、上は吾が君の徳に負き、下は吾が親の恩に負くことあらば、神明之を照覽ありて、忽ち吾が身を罰し給へとぞ祈誓を起しける。此の祈誓を起ししより三年目に及第して、遂には吏部郎の官に升りぬ。

今程學聖が洩しける幽冥の沙汰を、能々思案すれば吾が胸に響くが如く、正に吾が身に暗合せり。唯吾が身のみならず。凡そ立

身出世して名を天下に揚げ、功を國家に樹てて後世までに尊重せらるる者は、其の心を立つること潔く、みづから治むること深く、皆心中に大願を立てし者に非ざるは無かるべし。唯未だ曾て輕々しく人に語らざりしのみ。吾れとても何ぞ敢て輕々しく、之を人に語らむや。何ぞ敢て輕々しく之を人に語らむや。

然れども予は茲に忍びざる事こそあれ。其は田に落穂あれば、鳥其の友を呼び來りて共に之を啄む。野に芳き草あれば、鹿其の類を引き來りて共に之を食ふ。其の性然らしむるなり。今夫れ天下の士人は皆吾が同胞兄弟に非ずや。予斯かる有難き事を聞て、争てか之を同胞兄弟に告げざるに忍びむや。されば學聖君の物語と、予が經驗する事とを記して、以て之を諸士に告げて此の及第

の業は、精神を天に通ずるを本として、文才を世に銜ふを末とするものなることを悟らしむるなり。

功過格款

雲谷禪師傳

功格十條

賄を取り證を受けて爲しし者は、總て除く。

百功に準ずる者 ○一人の死を救ひ免れしむる。○一婦女の節を破るを完くせしむる。○人の子を溺死し、子を墮胎せむとするを諭して救ふ。

此の功過格款は、  
物の大小に依つて  
多寡の淺深に依つて  
功過の大小に依つて  
定めてある心や、  
親にも實は依り過ぎ  
親にも實は依り過ぎ



して、其の教化の一人に及ぶ。○興す所の事業の利が一人に及ぶ。○人畜の疲勞を濟ひ世話すること一時。○一匹の斃れたる鳥畜を瘞むる。○一の濕生化生の細蟲の命を救ふ。

百錢一功に準ずる者 百に足らざる錢は、數積りて後に計算す。米穀布帛の類も、錢に直して計算す。 ○道路橋渡を

開き、又は修造する。○河を疏け井を掘りて衆民を濟ふ。○聖

像堂塔及び供養物等を修覆する。 之を人に施與して、彼れに修覆せしむる者は、半を減す。 ○人の遺

れ物を還す。 百に足らざる者 ○人に貸したる債を饒す。○人を勸化す

る文書を施行する。○功德を作りて浮かまぬ魂魄に回向する。

○困窮の者を賑はす。○倉を建て置きて米穀の安き時に高く買

ひ高き時に安く賣る。○茶藥衣服等一切の事に施す。

過條五十條

誤りて犯したる者は總て除く。

百過に準ずる者 ○一人の死を致す。○一婦女の節を失はしむる。

○人を賛成して一子を溺死せしめ、一子を墮胎せしむる。

五十過に準ずる者 ○一人の世嗣の胤を絶たしむ。○一人の婚姻

を破談せしむる。○一人の死骸を抛棄にする。○一人の流浪を

致す。

三十過に準ずる者 ○一人の戒行を毀る。○誹謗を造りて、人の

身に庇を付くる。○陰事を摘發して人の行爲に邪魔をする。

十過に準ずる者 ○一の有徳の人を擯斥する。○一の邪人を薦用

する。○一の原節を失ひし婦人に觸るる。○一の人畜を殺す道

具を蓄ふる。

五過に準ずる者 ○一の世法を破滅する。○一の風俗を壞亂する

書を編輯する。○人の無失の罪の明白にすればせらるる者を棄て置く。○一の病人の救ひを求むるに遇ひて救はざる。○一人の訴訟を唆かす。○一人の譚名の謠を造る。○悪口して人を犯す。○道路橋渡等を截り崩し、或は妨ぐる。○人の益に立つべき一匹の畜命を殺す。

三過に準ずる者 ○一の無理を聞て瞋る。○一の尊卑の次第に乖く。○酔て一人を犯す。○一人の撲ち責むべからざる人を撲つ。○兩舌を使ひて、人の中を離間する。○一の非法の服を服する。○人の益に立たざる一匹の畜命を殺す。

一過に準ずる者 ○一人の善を無にする。○一人の争ひを唆かす。○一人の悪を打ち播く。○人の非法の一事を賛成する。○一の

盗を見て、意見して聞かせざる。○其の人に問はずして、其の一針一筆を取り用ふる。○一の無誠の者を欺き誑かす。○一の約束に負く。○一の威儀を失ふ。○一人の憂ひ驚くを見て、慰め釋かざる。○人畜を使役して、疲勞を憐まざる一時。○一の濕生化生の細蟲の命を殺す。

百錢一過に準ずる者 ○天の生ずる物を無益に使ひ盡す。○人の成したる功を破壊する。○大勢に背きて己れ獨り利を受くる。○人の錢を修りに使用する。○借りたる債に負く。○人の遺れ物を匿す。○百錢に足らざる者も之に準す。○官の威勢を假りて物を乞ひ索むる。○人の金錢資具を取る方法、一切の事を巧み作る。

右功過格を受持する者は、每晚其の日に作したる善事悪事を



篤と點檢し、其れを此の功過格の條款に照らして、明細に功と過とを、其の日の格下に記載せよ。若し此の條款に漏れたる事柄ならば、某の例を引くと記し置けよ。斯くして月末に其の功と過とを突き合せ差引勘定して、其の多寡を明記し置き、年末に總計してみづから罪福の伏する所を知れよ。

功過格款計量紙

年號 年 月

初一日

共善  
共過

初二日

初三日  
初五日  
初七日  
初九日  
十一日  
十三日  
十五日  
十七日  
十九日  
廿一日  
廿三日

初四日  
初六日  
初八日  
初十日  
十二日  
十四日  
十六日  
十八日  
二十日  
廿二日  
廿四日

廿五日

廿六日

廿七日

廿八日

廿九日

三十日

右の如く月々に結算し、年末に總結算して善惡何れか多きかを反省して、更に新年頭より一大努力を期するにあり。斯くて初め一二ヶ月は最も窮屈なるべし。一ケ年は苦痛、二ケ年の目より自然に近く、三ケ年目より樂くなるべし。四五ケ年の後より、人格化すと云ふ事である。(祖岳記)

袁氏家訓 拔萃冠註 譯陰隱錄 終

第三

善惡因果 種蒔和讚

廿五日

廿六日

廿七日

廿八日

廿九日

三十日

右の如く月々に結算し、年末に總結算して善悪何れか多きかを反省して、更に新年頭より一大努力を期するにあり。斯くて初め一二ヶ月は最も窮屈なるべし。一ケ年は苦痛、二ケ年目より自然に近く、三ケ年目より樂くなるべし。四五ケ年の後より、人格化すと云ふ事である。(祖岳記)

袁氏家訓 譯陰騭錄 終

第三

善惡 因果 種 蒔 和 讚

善惡 因果 種蒔和讃はしがき

この和讃は何人の作であるか明かでない。されど古く房陽の一隅に行はれたと云ふ。一讀再詠するに随つて、因果必然の道理を知り、三實稱名の心を明かにしたものであるから、正傳の佛旨に契ひ、世道を益するところ少くない。まして通俗にして而も卑しからず、高遠にして而かも解し易し、殊に現代、聲樂と稱名の隆盛になるの機に投じて稱詠せしめば、知らず識らずの間に、人天の福報を向上しつゝ、無上妙果に上るに小補あるべしと信じて重刻致しました。

大雲祖岳誌

善惡  
因果

# 種蒔和讃

(一)

現在の報は過去の行に依  
つて受けることを明す

凡そこの世に生れては  
無病ながいき財實は  
病身わかじに貧窮を  
前世で我身がなし置し  
三千人の弟子ありて  
世の男子に先立たれ  
一ばん弟子の顔回も

道徳集第三 種蒔和讃

貴賤貧富おしなべて  
誰しも願ふことなれど  
いやでも爲のは何故ぞ  
種が此世で生えしなり  
儒道弘めし孔子さへ  
一生貧苦をなされたり  
困窮若死せしことは

前世の種のはえしなり  
無病達者てなが生し  
前世の種がはえしにて  
是が神儒佛道の

(二)

禍福門なく心の向  
け様によつて来る

誰しも我身を省みよ  
前世の植し種なれば  
後世の苦樂の種ぞかし  
偽云はぬにしくはなし  
口と心が違ひなば

また盗跖といふ悪人は  
金銀裕かに暮せしも  
寔に因果の道理ぞや  
萬代不易の教なり

今の我身の苦と樂は  
今なす業の善悪は  
悪種を植ぬ用心は  
若も人目を飾るとて  
悪事かくしてよいやうに

人目飾りて済すとも  
問はればいかに答ふべき  
わけて正直第一に  
慈悲と智慧とを鏡とし  
樂もつらきも其本は  
それく教守りつゝ  
世のため國のためなれば  
やがて其の身の幸と  
かげとひなたのなき様に  
頭に神は宿るとや  
神佛守りたまふらん

神と佛と心とに  
此神國に生れては  
上を敬ひ下を愛て  
人と其身を照し見よ  
わが心より起るなり  
善と聞いては行へよ  
身分に随ひ勤むべし  
めぐりて歸る道理ぞや  
唯何事も正直の  
さあらば敢て禱らずも  
神や佛に守られて

無病長命安穩に  
種まくやうに心せよ

(三)

善惡因果の鏡には一  
點も曇り無しと知れ

因果の道理を信ずれば  
鏡に寫して見る如く  
此世で財寶持つ人は  
前世に善種蒔かざれば  
三世は喩ば目の前に  
今年には豊かに暮せども  
来年飢に及ぶべし

子孫繁昌福德の  
種まくやうに心せよ

我身の上も人の身も  
過去も未來も見ゆるぞや  
前世の種のはえしなり  
此世で貧苦に迫るなり  
去年豊年の潤ひで  
今年耕作怠らば  
遅き速きはあるとても

善惡因果の動きなく  
鈍なる人にも富貴あり  
伶俐で富貴になるならば  
富貴て子供の無きもあり  
我慢や力や錢金や  
富貴に大小ある如く  
善惡二つに蒔く種の

(四)

小因大果なれば小惡も  
恐れ小善も希ふべしと

凡そ因果の理を見るに  
小因大果といふぞかし

雪の達磨を轉す如く  
喩へば一粒蒔く種に

毛筋も違はて報ふなり  
伶俐てまづしき人もある  
鈍なる人は皆貧か  
何れも前世の種次第  
權威づくにはなりがたし  
又貧賤の大小も  
貧福大小はえ分る

かづ／＼實る道理にて  
報ふ苦患は限りなし  
多くの幸得らるなり  
むだには折らじとつしみて  
悪い根を断ち葉を枯らし  
榮えんことを願ふべし  
大罪許りを罪と知り  
止める心のなき時は  
桶一杯になる如し  
遂に地獄の業となる  
無量の果報得ること

少しの罪も恐れねば  
なす善根は少くも  
されば蚊の足一本も  
小善とても捨てず積み  
善の芽さしに土掛けて  
斯る道理をわきまへず  
少しの罪は常として  
水の滴いつとなく  
小罪とても恐れねば  
少しの善も積りては  
是に準へ知りぬべし

聖人孔子もこの理を  
後生と子孫を思ひなば  
種を惜んで蒔かずして  
田畑に五穀を蒔かずして  
種物一升蒔くならば  
然れば少しの蒔しも  
況や蒔し多ければ

(五)

誠ある施は萬福  
多幸の基なり

其施しをするときに  
借物かへすと思ふべし

易といふ書に説かれたり  
慈悲善根の種を蒔け  
穀物取たる例なし  
自然に生たる例なし  
五升や一斗は實るべし  
果報は益々あることぞ  
福德圓滿限りなし

呉れると許り思ふなよ  
呉れるも貰ふも因縁ぞ



貧福貴賤の有様は  
今貧賤のその人は  
富貴もながく續かねば  
いか程蓄へ置とて  
情を願ふ人々に  
神や佛へ奉納の  
現世の子孫の繁昌も  
可成に暮その内に  
慾に限りは無きものぞ  
貧てあせるは是非もなし  
多くの寶を譲りても

皆是浮世の習なり  
昔の長者と思ふべし  
金銀田畑山林  
おとろへぬれば人の物  
興てのこそせ其福を  
品はます増なほ残  
我身の後生も思ひなば  
なるたけ施するがよい  
あればあるほど足らぬもの  
富貴てあせるあさましさ  
其子の魂悪ければ

程なく残らず賣拂ひ  
少しも財産をゆづらずも  
いかに我子を思とも  
錢金多く譲るより  
神や佛があづかりて  
司馬温公といふ人は  
子孫の爲を思ひなば  
無理して溜る金錢は  
却つて子孫の仇となる  
筆の先にて無理すれば

親や妻子を歎かす  
天晴仕出かすものもある  
其子の福德次第ぞや  
善根多く積置かば  
子孫へ渡し給ふぞや  
此理常に説れたり  
人をたをさず施せよ  
人の恨みがかかる故  
升やはかりや算盤や  
天道許し給ふまじ

(六)

正直と慈悲と勤勉は人間の道にして忠孝の本なり

美目はよくても富貴でも  
なりは悪くもぶこつても  
貴き賤しきをしなべて  
正直柔和と云るるが  
下たるもの慎みは  
常に御恩を忘れずに  
家業大事に勤むるが  
先祖や親への孝となり  
錢金ありて貸す人も

うそほど人の瑕はなし  
正直程の實なし  
人は美目よりただ心  
上なき手柄と思ふべし  
上の噂を云ずして  
士農工商それくの  
即ちお上へ忠義なり  
その身は安穩なるならん  
餘り過分な利をとるな

物事非道をする人は  
死際苦痛凄じく  
修羅や地獄の苦を受けて  
假令草木は生ずとも  
親の因果が子に報ふ  
各々榮華に暮すのは  
家業大事に勤むべし  
親は物ごと子のためと  
子の爲許と思へども  
親の心をつゆ知らず  
放埒盡すあげくには

道華集第三 種蒔和讃

たとへ此世にすむとても  
死ぬれば餓鬼や畜生や  
屋敷は草木が生茂る  
非道は子孫の仇ぞかし  
例しは世間に數多し  
前世に蒔しよき種ぞ  
先祖の苦勞の御かげなり  
幼時より身にかへて  
子供の心得悪しければ  
身の分際を忘れはて  
田畑家藏屋敷まで

他人の物となりぬれば  
不孝と云も餘りあり  
烏に反哺の孝あるに  
烏や鳩にも劣るぞや  
成丈身持大切に  
両親達者なその内に  
慈悲善根を心がけ  
両親此世におはさずも  
子達の影に離れ得ず

(七)

二經を引き信施  
の心得を示す

親のなげきはいか許り  
鳩にも三枝の禮儀あり  
親に不孝の子となれば  
親を持ちたる人々は  
親の心を休ませよ  
悪事懶惰を打捨てて  
父母の後生を祈るべし  
親の靈は夜晝に  
守らせ給ふぞ有難し

財寶を使ふ道知らて  
多くの費をいとねど  
生爪はがす思あり  
歡び勇んで喜捨すべし  
又は慈善の求めには  
四十二章經にみ佛が  
悪人千に恵むより  
善人千に恵むより  
千の羅漢に恵むより  
千の菩薩に恵むより  
例へば一粒蒔くとも

名聞おごりに仕ふには  
慈悲善根の一錢は  
子や孫仕立てる思して  
貧窮乞食や寄べなき  
心の丈けを施せよ  
施す道を説き給ひ  
善人一一人に施せよ  
羅漢一人に施せよ  
一人の菩薩に施せよ  
一人の佛に施せよ  
田畑の肥瘠で收穫に

多し少し違ふごと  
優婆塞戒經にまた示す  
大臣長者も餘財なし  
赤の裸の貧しきも  
恵みの功德知りぬれば  
剛慢我慢愚痴怒り  
功德の深き限りなし  
貧女の一燈功德あり  
必ず恩にはきせるなよ  
恩にきすれば徳薄し  
つく／＼考へ見が好い

恵の徳もかくと知れ  
心なければ大國の  
恵む一心發りなば  
施す道は數あるぞ  
盜の罪業の恐ろしや  
心の三毒を捨て施るは  
長者の萬燈供養より  
何程施するとても  
我身のための施を  
世の人々よ目をふさぎ  
いかなる大福長者でも

時節來れば是非もなく  
捨て冥途の旅に立つ  
行術も知らぬ死出の旅  
兎角命のある内に

(八)

無常を念じ最善の種  
を早く蒔き置べしと

人の命のはかなさは  
今宵頭痛がし始めて  
朝がけ争論した人が  
今日には他人を葬禮し  
財實妻子我身まで

金銀財寶妻子まで  
耳も聞かず目も見えず  
閻路に迷ぞ哀れなり  
菩提の種を蒔き置けよ

草葉の露に異ならず  
其夜に死病となるもあり  
暮に頓死をするもあり  
明日は我身の葬禮ぞ  
皆は無常のものなれば

頼み少なき娑婆界ぞ  
無常々々と皆人の  
心に慥に知らぬゆゑ  
いとしい妻子に別れては  
思ひ亂れてやるせなく  
尼法師にもなるべしと  
いつしかそれも忘れはて  
放埒邪見をおこすなり  
手綱許さず引しめよ  
かなりに暮す人々も  
貧苦の人に施せよ

無理貪慾はせぬことよ  
口には賢く云ひ乍ら  
俄に無常に誘はれて  
世に無きことに會ふやうに  
共に消たき思ひにて  
今日よ明日よと言ひつれど  
あたら心をととり亂し  
人の心は春駒の  
福者は勿論今日を  
分相應に及ぶだけ  
慈悲善根は其儘に

我身子孫の祈禱なり  
必らず思ふこと勿れ  
とりもなほさず此世にて  
受けて楽しく暮すなり  
佛の慈悲に守られて  
自然と障はなきものぞ  
難義な病者貧人を  
豊かに暮す甲斐ぞかし  
即ち孫子の爲と知れ  
願ひ好んでするものか  
貰つて命つなぐのは

後生の爲の教ぞと  
あの世大事の行は  
福德智慧の幸を  
斯くせば神の方便と  
悪鬼魔縁も近かず  
人の頭に立つ者は  
成丈あはれみ救ふこそ  
情は人の爲ならず  
世間に乞食する者も  
食のあまりや捨る物  
前世に邪見と慳貪と

非道の種を蒔き散し  
是非なく門戸に立ち迷ひ  
生れし形は人なれど  
此有様を見るならば  
因果はめぐる車にて  
前世の我等が父母や  
何かの縁があればこそ  
この心得て手の内を  
施す品は少しでも  
親や我身の後世菩提  
慈悲善根の上き種を

其種此世へ生て來て  
暑さ寒さに苦みて  
宛然餓鬼の有様ぞ  
皆々不便に思ふべし  
貧い人をも乞食をも  
又は兄弟親るいが  
便つて來るぞと思ふべし  
眞心こめて施せば  
我身の果報は莫大ぞ  
子孫繁昌願ひなば  
澤山蒔き置く様にせよ

大小上下の人々の  
無ければ人が人てなし  
情あるので人と云ふ  
慈悲といふ字と心得よ

(九)

佛法に歸依するのは  
神慮なることを示す

我が日本に生れては  
農家商人諸職人は  
佛道ならう國法は  
神國神慮の證據あり  
大社といへば神宮寺

分相應に仁心は  
孟子の所謂仁心は  
人といふ字は其儘に  
是が聖人の教なり

天子も公家も大臣も  
乳呑子迄も是非共に  
源神慮によることは  
都鄙もおしなべて  
たて置るるぞ合點せよ

伊勢内宮の御寶の  
實基本記にその理由を  
されば神慮をかしこみて  
神慮をつつしみ奉れ  
八萬四千と分るれど  
朝な夕なの信心は  
胎お産元服も  
病氣の時も臨終も  
三歸唱へて正覺を  
五家七宗の掟にて  
承陽大師ねむごろに

恭敬三寶と宣へり

(十)

三歸依是れ依止なり安  
心是れ生活なりと結ぶ

況んや無智の人々は  
手間暇入らず智慧入らず  
常々忘れず唱ふれば  
附添ひ守り給ふ故  
生涯無事に日を送り  
保つて此身の終りには  
成等正覺疑はず  
六神通を悟り得て

神藏十二の隨一の  
大神宮の宣へり  
佛法信心修行して  
その佛法は各宗に  
わけて我宗の定めには  
云ふも更なり其外に  
婚禮祝ひお祭も  
願ふがすべて昔より  
西天東土の正傳は

仰いて深く信ずべし

外の修行はなり難し  
錢金入らぬ三歸依を  
諸天善神夜晝に  
厄病横死の難もなく  
定業の命を存分に  
佛祖の大悲に濟はれて  
等正覺を成ずれば  
生々世々の父母や

孫や子供や親類を  
病氣もなく年よらず  
二世安樂と云ふぞかし  
兎角心の儘ならず  
明日の請合ならざれば  
何はさておき用意せよ  
三度の食の用意をば  
一大事實の臨終の  
來世と云へば皆人が  
吹息一つかへらねば  
然らば日々に三歸依を

自由自在に濟度して  
死ぬる事なき身となるを  
此世は堪忍世界とて  
殊更老少不定にて  
永き未來の浮き沈み  
冬の綿入れ夏のきぬ  
忘れず整へ置ながら  
用意忘るる愚かさよ  
程ある様に思へども  
其場が直ぐに未來ぞや  
十返百篇千篇も

朝にも晩にも唱ふべし  
野でも山でも寝て居ても  
士農工商その業の  
此時大信心起らずば  
起居座臥唱ふべし  
南無歸依僧

その餘は思ひ出し次第  
何して居ても唱ふべし  
障りにならぬ三歸依ぞ  
再び時節はなかるべし  
起居座臥念ずべし  
南無歸依法

(繰返し唱ふべし)



承陽大師 徒らに過す月日は多けれど道を求むる時ぞすくなし。  
 榮西禪師 奥山の松の叢立ともすればおのが身よりぞ火を出しける。  
 行基菩薩 山鳥のほろくと鳴く聲聞けば父かと思ひ母かと思ふ。  
 月庵禪師 枯れ果てしかも花咲く梅が枝に聲をもたてず鶯ぞ鳴く。  
 眞阿上人 慈悲の目に憎しと見ゆる人はなし過ある身こそ尙あはれなり。  
 他阿上人 長閑なる水には色も無きものを風の姿や波と見ゆらん。  
 法然上人 月影の至らぬ里は無けれどもながむる人の心にぞすむ。  
 同 分け登る麓の道は多けれど同じ高嶺の月を見るかな。  
 親鸞上人 人間をすてし程こそ淨土なれ覺て見れば方角もなし。  
 一休和尚 思ふこと一つ叶へば二つ増す三つ四つ五つ六つかしの世や。  
 西行法師 憂きことの品こそ變れ世の中の心安くてすむ人はなし。  
 同 すと果てて身はなきものと思へども雪の降る日は寒くこそあれ。

大燈國師 憂きことの猶も我身につもれかし捨し心の誠をや見ん。  
 明恵上人 石上に花を植にし其日より日々に花見る心地なりけり。  
 日蓮上人 心からよこしまに降る雨あらじ風こそ夜の窓は打らめ。  
 如大禪尼 千代のをか頂く桶の底ぬけて水溜らねば月も宿らじ。  
 正徹書記 白露のおのが心を其儘に紅葉に置けばくれなひの玉。  
 北條時頼 幾度か思ひ定めて變るらん頼むまじきは心なりけり。  
 同 心こそ心迷はす心なれ心に心こそ許すな。  
 明治天皇 罪あらば吾をとがめよ天つ神民はわが身の産みし子なれば。  
 吉田松陰 親思ふ心にまさる親心今日のおとづれ何とさくらん。  
 古 先の代で借りしをかへすか今貸すか何れをひめはあるものと知れ。  
 同 父はうち母は抱いて悲むをかはれる心と子や思ふらん。  
 同 傀儡師首にかけたる人形箱佛出 そうと鬼を出そうと。

第四  
正宗國師坐禪讚

同 同 同 同

植て見よ花の育たぬ里はなし心からこそ身は卑けれ。  
極樂は西にもあれば東にもきた道さがせ南にもある。  
剃りたきは心の中の亂れ髪つむりの髪は兎にも角にも。  
堪忍のなる堪忍は誰もするならぬ堪忍するが堪忍。

同 同 同 同

植て見よ花の育たぬ里はなし心からこそ身は卑けれ。  
極樂は西にもあれば東にもきた道さがせ南にもある。  
剃りたきは心の中の亂れ髪つむりの髪は兎にも角にも。  
堪忍のなる堪忍は誰もするならぬ堪忍するが堪忍。

第四

正宗國師坐禪讚

正宗國師坐禪讚

衆生本來佛なり  
水をはなれて氷なく  
衆生近きを知らずして  
たとへば水の中に居て  
長者の家の子となりて  
六趣輪廻の因縁は  
閻路にやみぢを踏みそへて  
夫れ摩訶衍の禪定は  
布施や持戒の諸波羅蜜

水と氷のごとくにて  
衆生の外に佛なし  
遠く求むるはかなさよ  
渴を叫ぶがごとくなり  
貧里に迷ふに異ならず  
己が愚痴の閻路なり  
いつか生死をはなるべき  
稱歎するに餘りあり  
念佛懺悔修行等